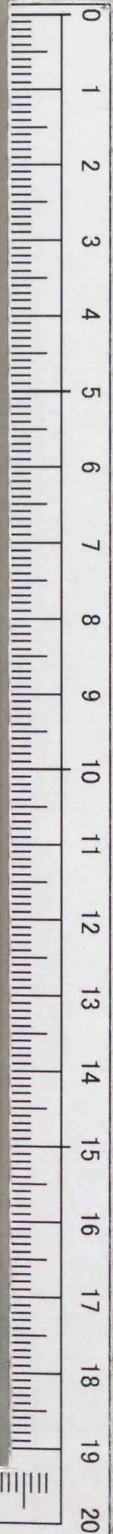


大日本讀本 卷一

375.9
Ta11
資料室



41699

教科書文庫

4
810
41-1930
20000 53174

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

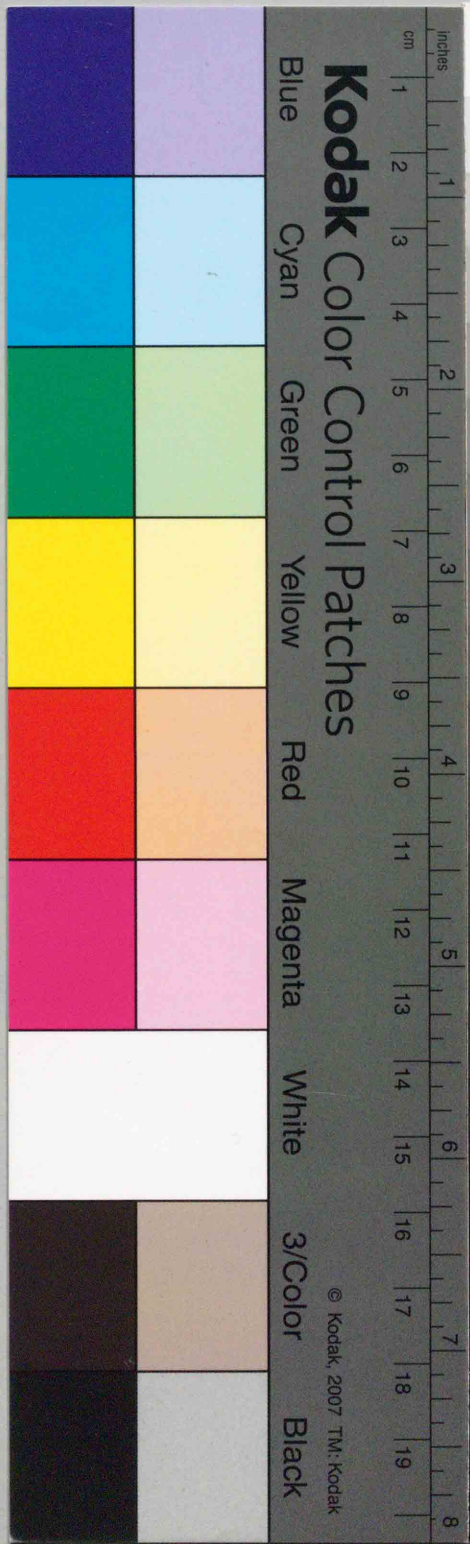


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室 375.9

T411

278
10

文部省檢定
昭和五年二月十三日
中國語科用

文學博士高木武編

大日本讀本

東京 富山房藏版

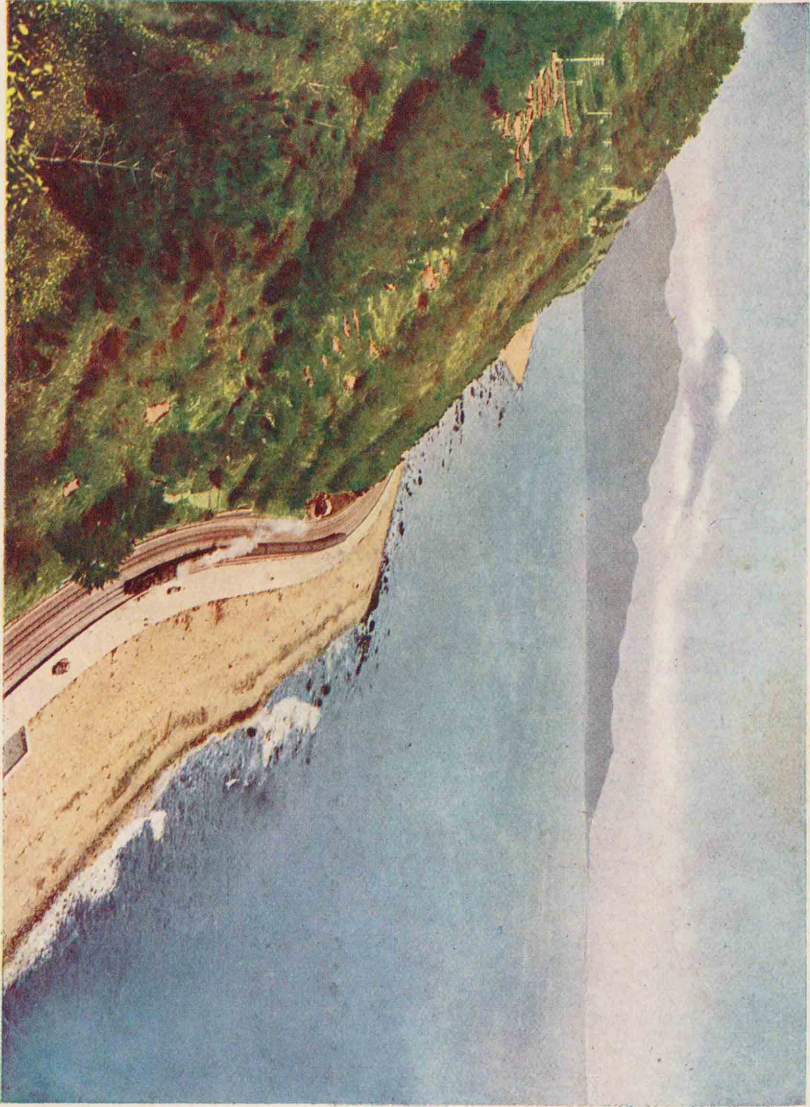


表紙	御物上代染織文
扉	紫地葡萄唐草文錦
同	淺縹地唐花大文錦
	(帝室博物館許可濟)

山科橋下二場及字部

富山房藏

Imai yama Joken



旅人とのなごり



大日本讀本卷一

目次

一	我等の春	中西悟堂	一
二	大和男子	若山牧水	八
三	明るい自然	多摩御陵に詣でて	五
四	多摩御陵に詣でて	御勉學時代の今上陛下	二
五	御勉學時代の今上陛下	荒芳徳	三
			三
			三
			三

六	ボートレース	久米正雄	三
七	赤道祭	吉江喬松	四
八	五月節句の教訓	萩野由之	四
九	初夏風景	徳富健次郎	五
	一 雨後の上州		五
	二 湘南の日没		五
一〇	寓話	楠山正雄	六
	一 山と栗鼠		六
	二 獅子と兎		六
	三 幸福の訪問		六
一一	生存競争	丘浅次郎	六

一二	蜘蛛	岡本綺堂	七
一三	山の牧場	前田鐵之助	七
一四	甕わり柴田	湯浅常山	八
一五	機智の話	生方敏郎	八
一六	猫の失敗	夏目漱石	九
一七	犬ころ	二葉亭四迷	九
	一		九
	二		九
一八	汝の母	姉崎嘲風	一〇
一九	戦の後	西條八十	一〇
二〇	旅人となりて	吉田絃二郎	一〇

二一	槍が嶽へ	窪田 空穂	二七
二二	星	山本 一清	二八
二三	漁火	相馬 御風	二九
二四	歌ごころ	北原 白秋	三〇
二五	月雪花	芳賀 矢一	三一
二六	我が幼時	新井 白石	三二
二七	大東京	正岡 子規	三三
二八	故郷		三四

大日本讀本 卷一

一 我等の春

大空に溢れる春の日の輝きの中に、若芽は伸びるだけ伸びる。櫻は咲くだけ咲く。青草の野に陽炎がもえ立つ。霞の中に雲雀が鳴く。天も地も明るく、快活な希望と喜の歌を合唱してゐるやうだ。かうして、あらゆるものが蘇り、元氣一ぱいな、はちきれさうな力で上へ〜と伸びようと、してゐる春こそ、まさに我等の世界だ。

我等は今この春の最中なかに中學生となつた。光榮に充ち、希望に満ちた我等を、自然は爽かな笑をもつて、祝福してゐるやうに思はれる。本當に何といふ喜ばしい春だらう。しかしよく考へてみると、我等にはもつとく遙かに大きな幸福がある。

それは、我等が日本人として、昭和の大御代に生まれあはせてゐることだ。日本の國體や風土や國民精神の萬國無比なことは、今更いふまでもないが、單に無比といふばかりでなく、大磐石のやうに張つた舊い立國の根幹には、實に強い底力がある。しかも、その舊い強い根幹の上に、常に清新な活氣が生じて、あたかも春がめぐつて來て喬木

の梢にもえる若芽のやうに威勢よく國運が伸びてゆく。殊に明治維新以來、世界の最舊帝國は、最も若々しい新興帝國となり、見る／＼諸外國を追抜いて、世界一等國の班に入り、大正時代には進んで三大強國の一に數へられるまでになり、更に希望多き昭和の大御代を迎へるに至つたのだ。

我が國が國號を日本と稱し、日の丸を國の旗章としてゐるのは、太陽をかたどつたものだが、今や國光があまねく四海に照りわたり、この國號、この旗章のいよ／＼我が國柄にふさはしいことが思はれる。將來大いに伸び、ますます榮えてゆく昭和の大御代を、我等は何といつて謳歌

していいかわからないくらいだ。こんな立派な國に生まれ、こんなめでたい御代にあひ、そして今、春なつ酬なはな頃に中學生となつた我等は、實に世界中で最も恵まれた者であるといふべきではないか。しかし我等は徒にそれを喜ぶだけでなく、それに對して心の底から感謝すると同時に、この誇を永久にもち續け、一層それを發揚するやうに努力しなければならぬ。

我等の前途は昭和の大御代と共に輝かしく、喜に満ちた春と共に多望である。我等は一步々、若々しく、しつかりした歩調をもつて、雄々しく進んで行かうではないか。

二 大和男子

中西悟堂

雲とたなびく櫻ばな

咲いて且散る、そのごとく

大和男子やまとのおとこは潔く

生きよ、恵の日の本に。

溢る、命、夏の日の

木草、野山に充てるごと

すこやかなれや、大海の

潮とも湧けや、若やぐ血。

はた、萬象の澄みわたる

秋の天地のそのごとく

心を磨け、もみぢ木の

錦を飾れ、その胸に。

嚴冬衝いて咲きにほふ

かの梅が香を、貞潔を

學べや、素朴堅忍の

力を國の礎と。

あゝ天皇の大御稜威

かしこみ仰ぎ、み恵の

あつきをたゝふ民草と

生きよ、心を協せつゝ。

〔禁轉載〕

香貫山
静岡縣沼津市
の東郊に聳え
る。

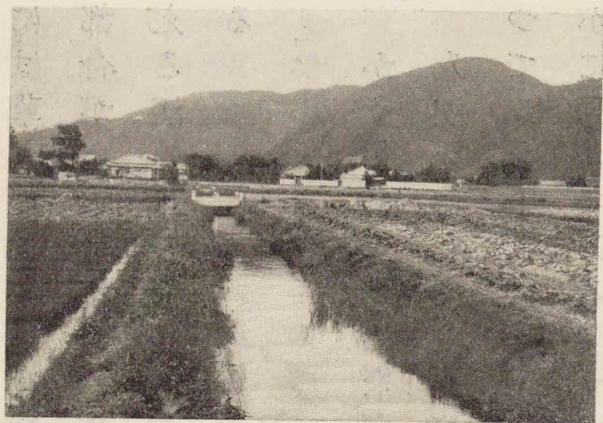
三 明るい自然

若山牧水

書齋の窓際の椅子に腰掛けて、少し體を前かゞみにすると、眞白な櫻木立の間に香貫山が見える。その圓みのある山をつゝんだ小松の木立も、この數日來急に春めいて來た。山一面の小松の緑青色が一際鮮かに浮きあがつて見えるのである。

何といふことなく私の心はやはらぎ、しきりに山の青いのが懐かしくなつたので、椅子を立つて、裏木戸から畑の中へ出た。

畑つゞきにその山の麓まで私の家から五町と離れて



香貫山

私は中腹のやゝ窪みになつた所まで登つたが、そこに

みないのだ。畑には大抵百姓たちが出てゐた。麥は穂をはらみ、豌豆には濃い紫の花が咲いてゐる。附近の百姓家からでも來るのか、そんな畑の中にも櫻の花片の散つてゐるのが見られる。古い寺の裏を通り過ぎて登りかゝる道は、この小山に登る四つ五つの道のうち最も険しい道である。しかしそれが私の家からは一番近い。

江の浦
沼津市の東南
方にある入江。

は他の場所と同じくやはり一面に小松が生えて、松の下には、草が程よく地を覆うてゐる。そこからは、海を見るに都合がいい。殊に廣い駿河灣一帶よりも、すぐ眼の下に見える江の浦の細長い入江を見るに格好な所に當つてゐる。

「やれ〜。」

かう獨言をいひながら、私はそこにつき坐つた。

入江を越した向ふの伊豆の連山には、重い白雲がかゝつてゐた。上は濃く、下は淡く、そしてその淡い所だけが微かに動いてゐるやうに見えた。山かげの入江は、いかにも冷たくどんよりとして、どこをたづねても小波一つ立つ

てゐるやうとも思はれなかつた。不思議とまた、いつもは必ず二つか三つ眼につく發動機船も小舟も一向に影を見せなかつた。入江に沿うたこちら側の長い松原の蔭には、夢ばかりが散残つてゐるやうな桃の畑が、しめり深い空氣の中に、氣味悪い赤みを帯びて連りわたつてゐた。

重い雲の底を吹くともなく吹いてゐる風は、殊に山の上だけに相當に寒かつた。そのうちに、ぼつりと冷たいものが額に



伊豆の連山

當つた。氣をつけると、袖にも足袋にも小さな雨が降つてゐる。しかし眞上の空は青みこそないが、いかにも明るく晴れてゐるのであつた。

が、終にあたりの葉の深い松の木を探して、その蔭に引つこまねばならなかつた。急に雨の粒が大きく荒くなつて來たのである。松の蔭に入ると、惜しいことには海は見えなくなつた。

次第にあたりの松の葉がぬれていつた。それらの小さな松のそれらの枝のさきには、いづれにも今年の新しい芽がほの白く伸びてゐる。淡い緑の上に白い粉をふいたやうなその柔らかな芽のさきには、また必ず桃色か紅色

の小さな玉が三つか四つづつ着いてゐた。露ほどの大きさで紅色の美しいのもあり、既に松笠の形をして紅の襖あはせせてゐるのもあつた。それに微かに雨がそよいでゐるのである。

帽子の前に垂れてゐる松の葉のさきからほつりほつりとしづくが垂りだした。しかしまだ羽織の袖は十分にはぬれて來ない。心はいよゝゝ靜かに明るく、あたりの木も草も、まつすぐに降る山窪の雨の白さも、みな極めて楽しい眺となつて來た。

「燕……」

私は思はず聲に出して、自分の前の山あひに舞下りて

はまた高く舞上つて行く小さな鳥に眼をとめた。全くそれは今年始めて見る燕であつた。

「来たなあ。」

さう思ひながら、私は松の蔭からはひ出して行つた。一羽、二羽、三羽とつゞいてその身軽な鳥は、眞青な小松の中をわたつてゐるのだ。

幸と雨は晴れて来た。急に輝いて見える伊豆の山の白雲のかげの海の色は、山の根だけ日本刀の峰などに見る青みを宿し、片側の廣い部分には、さら／＼として細かな波を立てはじめてゐた。

四 多摩御陵に詣でて

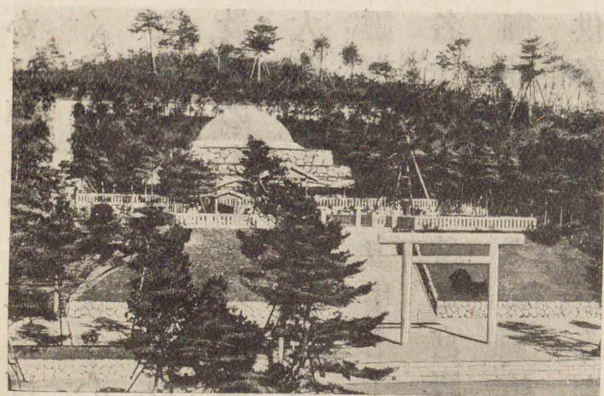
上田君。昨日は随分麗かなお天気だつたので、僕は弟をつれて、始めて多摩御陵に詣でた。中央線浅川驛に着いたのは午前十時頃だつたが、それから廣い氣持のいい道を十町ばかり行くと、すぐ參道の入口に出た。せゝらぎの音もやさしい浅川の流にかゝつた南浅川橋を渡れば、兩側にみづ／＼しい若葉をつけた櫟りきの並木が整然と續いて、白い玉川砂利の敷かれた參道は、日の光を浴びてまぶしい。參道は緩くうねり、緩く斜

浅川驛
東京府浅川町
にある。

浅川
末は多摩川に
入る。

高尾山
淺川町の西方
に聳え、東京
西郊の名所に
なつてゐる。

面をなして、一路参拜者を御陵に導く。櫛の並木
のあなたは、いはゆる武藏野で、麥畑・桑畑にはそ
よそよと春風がわたり、菜種や大根の花が毛氈
を敷いたあたりには雲雀も鳴いてゐる。
やがて神苑に入れば、一面にすく／＼と立つ
杉の若木の梢の上に、高尾山が淡い霞に柔らか
くつゞまれて、午に近い春の空を劃つて見える。
あたりは一しほ森嚴の氣を漂はして、僕はおの
づと身も心も引緊るのを覺えたが、いつしか参
道は盡きて、御陵の大前に出てゐた。檜の大鳥居
は日に照りはえて、銀のやうに輝く。おゝ、その奥



多摩御陵

を見上げた僕が目には、大正天皇の英靈とこし
へに鎮ります御陵が仰
がれたのだ。僕は清らか
な山水に口をそゞぎ、手
を淨めて、大鳥居の下に
立つた。
上田君。その瞬間、僕の
心は、何ともいへない神
氣に打たれて、水のやう
に澄んだ。あたりにゐる
多くの参拜者も、寂として聲をたてる者はない。

御大葬儀
昭和二年二月
七日に行はせ
られた。

青山通
東京市赤坂區。

たゞそよ吹く風の幽邃な松林をわたる音が微かに傳はつて來るばかりだつた。やゝあつて、漸く首を擧げた僕の心に我知らず浮かんだのは、あの御大葬儀當夜の悲しみに閉された思出だ。最後の御幸の鹵簿が、篝火の色も愁はしい都大路をしづくと過ぎ給うた時、僕も青山通で靈柩をお送り申し上げたが、當夜、今上陛下の御名代として秩父宮殿下が、零下十二度の嚴寒に御外套も召されず、始終うつむきがちに肅々と供奉遊ばされてゐた恐多い御姿は、つい先ほど涙と共に拜したばかりのやうに僕の胸に蘇つ

〔採轉載〕

た。僕は御陵の大前を辭して、再びもとの參道を歸る途すがら、胸はふさがり、弟とも殆ど言葉をかはず、その心持は、午後二時頃家に歸り着くまで續いたのだつた。別封の繪葉書は、その時參道に沿うた繪葉書屋で買ったものだ。僕の手紙は繪葉書と對照しながら読んでくれ給へ。さやうなら、御機嫌よう。

五 御勉學時代の今上陛下 二 荒芳徳

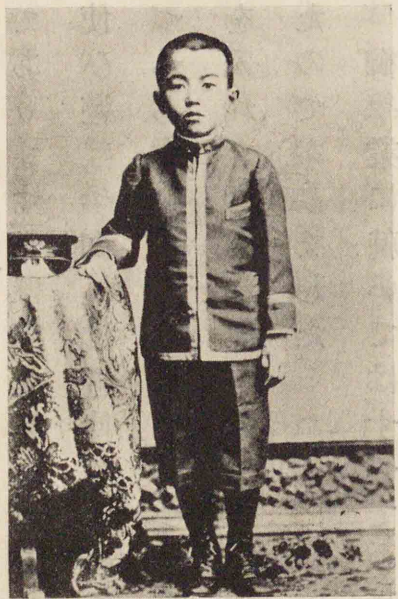
一

今上陛下には明治四十一年四月、御歳八歳をもつて、學習院初等科に御入學遊ばされました。當時の院長は乃木大將で、陛下の御教育に身をもつて當られました。陛下には皇孫御殿より毎日御徒歩で四谷區仲町の學習院へ、秩父宮・高松宮の御弟殿下と御手をとらせ給うて御通學になつたのであります。

乃木大將のことを「院長閣下」と呼ばせ給ひ、御學友に對しても極めてお優しく、もし病氣などで缺席する者があ

皇孫御殿
青山御所内に
あつた。

りました場合には、いたく御心を惱ませられ、後日登校の節は、必ず「もうなほつたか」といふやうな有難い御言葉を



御勉學時代の今上陛下

賜はるのが常で、その都度、御學友は眞に身にしみて有難く存じ上げたのであります。當時の御日常を拜しますれば、午前六時に御起床になりました。直ちに御洗面の上、更に淨水をもつて御手洗を遊ばされ、御拜の間に入らせられました。まづ伊勢神宮を始め奉り、宮城なる明治天皇昭憲皇太后に

御遙拜を遊ばされ、更に御兩親陛下に御拜の後、御朝餐をおとりになりました。規則通りの御日課をお修めになるのであります。夜分は午後八時頃には御寢まゐになつたのであります。なほ御几帳面であらせられることは、毎日お使ひ遊ばす御机は、近侍の者の手を煩はすことなく、御みづから布巾をお持ちになつて、御顔の赤らむまでに御力を入れさせられ、優しい御手にごし／＼と押拭はせ給うたのであります。

御學業に就いては、すべての科目に御熱心であらせられました。が、わけて博物には御興味をおもち遊ばしまし、て、魚介鳥獸・草木・鑛物などを御採集になり、これを一々御

桃郷
沼津市の南郊。

みづから御分類・御整理遊ばされました。また求知心に富ませられました。御散策の時、さへも常に御心を學問にお注ぎになりました。一例を申しますと、たま／＼御轉地先である沼津桃郷ちやう附近に一つの凱旋記念碑があるのを御覽になつて、小さな御手帳をポケットからお取出し遊ばして、碑文中のやさしい漢字などをお楽しげにお書取りになつたことがあります。それゆゑ、學校で御習得の漢字なども字劃正しく御記憶になり、そしてまたよくこれを御使用になりました。

陛下の御記憶力のすぐれさせ給ふことは、御幼少の時から既に人の驚嘆し奉るところでありまして、學業課程

「イソップ物語」
ギリシャのイ
ソップといふ
人の作つた
とへ話。

に關しては勿論、他より聽かせられた談話などもよくそれぞれ御記憶になりました。また創造の御力に富ませられて、御在學中「新イソップ物語」の御創作があります。これは陛下が「イソップ物語」



御馬上の陛下

を御愛讀になつて、それから御構想を得られたものでありまして、その中に「鮠と蛙」の一節があります。それは鮠がひ

でりて水がなくて、非常に苦しんでゐるのを、蛙が見つけて氣の毒に思ひ、水のある所までつれて行つて助けてやるといふ筋で、既に帝王としての御仁慈の御きざしが、この御時代に拜せられるのであります。

御日記は御幼少の頃から既にお始めになつて、興味ある出來事は常にお書きとめになつていらせられました。が、大正三年頃よりは、日々規則正しく御記入遊ばされ、今なほ御繼續になつていらせられます。

御寫眞の御撮影もお好みになり、修學旅行、郊外見學などの折々には、御手づから御撮影になつて、丁寧に御整理遊ばされ、説明書も加へて御保存になるのが例でありました。これは一面、御嗜好による御慰ではあります。また他面において、御日記の補遺としてつけ加へさせられた

ものであります。

運動は御幼少時代から各種の方面に御興味をおもちになつていらせられました。殊に人取遊戯軍艦遊相撲などをお好みになりました。やゝ御成長の後、木劍體操乗馬擊劍などを遊ばされ、御學友と共にその技を練らせられました。また可憐なお伽遊戯などもお好みになつて、桃太郎浦島太郎、それからイソップ物語中の表情遊戯などもしばしばお繰返しになりました。室内の遊戯としましては、行軍將棋、雙六、鬪球盤などもお好みになりました。

かくて大正三年四月二日、陛下には學習院初等科の御

高輪御所
東京市芝區高
輪にある。



帥元郷東と下陸

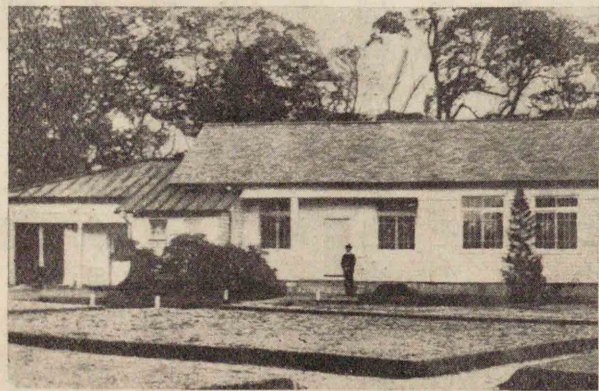
課程を御卒業遊ばされましたので、更に進んで御勉強あらせられるため、高輪御所内に東宮御學問所を設置されました。

そして御父陛下には、御學問所總裁に東郷元帥を御任命になりました。これによつて、陛下は、學習院時代には乃木大將に、御學問

所時代には東郷元帥に御傳育をお受け遊ばしたのであります。明治時代の日本が、國を賭して戦つた二大戦役に、幾萬の忠烈な同胞を率ゐて決戦の衝に當り、國家興廢の

一大事を己が雙肩に擔つて、全日本國民の信賴を一身に集めたこの兩大將が、身命を捧げて夢寐の間も兢々として皇儲の御教育に盡くされた苦心は、我々國民の一員として最も深い感銘を覺えるのであります。御學問所の終頃には、各地方を御旅行、御見學など遊ばされまして、親しく民情を御視察になり、また伊勢神宮を始として、山陵社寺などに御參拜遊ばされ、或は各地の史蹟・名勝の御歴訪、或は動物・植物・礦物などの御採集など各方面にわたつての御修養に努めさせられたのであります。殊に博物學に對しての御趣味は一層加へさせられま

して、御採集の標本類をまとめて標本館をお設けになり、御みづから一切の御整理を遊ばされ、且御幼少の頃から御使用遊ばされた御玩具類なども鄭重にとりまとめ、この標本館に陳列御保存になりました。かつて御奉公申し上げた保母などが御機嫌奉伺のために參殿致しますと、陛下はいつもこゝにおつれになつて、いろ／＼の御玩具の並んだ前で、くさ／＼の昔語を遊ばされたさうであります。



生物學御研究所

この外、御庭には花園もあり、小鳥飼育場もあり、且また小水族館などもあつて、水中小動物などもお飼ひになりました。また御自作の農園も設けられました。御手づからいろ／＼な御野菜をつくらせられ、その初なりを御兩親陛下に御献上になるのを、この上ないお楽しみと遊ばされました。

また陛下には、同所に御在學中、御自分の御自由な御構想で、しば／＼御演説をお試みになりました。その題材は主として史傳中に古今東西の偉人を求めさせられ、その言行に就いて評論を遊ばされることが多かつたのであります。その御立派な御態度、堂々たる御論旨に對し、常

に御進講者の深く敬服してゐましたことは、しば／＼私の洩承つたところであります。

この御時代に、日本歴史の御進講者が、日本歴史を通じて最も御印象の深い事柄は何でございますか。と御質問申し上げたのに對して、蒙古襲來の時に、龜山上皇が身をもつて國難に代らんことを伊勢神宮に御祈願になつた事であります。と答へさせられたさうであります。また杉浦重剛氏が或日、殿下の御愛誦の章句は何でございますか。とお尋ね申し上げましたところ、陛下は即座に『禮記』の『日月、私照なし。』であります。と仰せられたさうであります。また同じく御學問所時代の御話ですが、歴史の時間に、

龜山天皇
第九十代。

杉浦重剛
學者。一代の
人格者として
崇拜され、東
宮御用係とな
つた。大正十
三年歿。
「禮記」
支那の周代に
作られた書物
で、禮儀に就
いて述べられて
いる。

御進講者が「仁徳天皇の御宇、民の疲弊がその極に達し、天皇は三年にわたつて租税を御免じになるに至つた原因は、何にあるのでございませうか。」と御質問申し上げますと、陛下には御一考の後、「それは、三韓征伐に原因を發してゐるのでありませう。」とお答へになりましたさうですが、この御答の前後に、御學友はいづれも級中の優秀者でありましたが、かゝる透徹した答辯をなし得なかつたさうであります。

かくして陛下には、御研學の功を積ませられましためでたく御學問所の七箇年を御經過になりました。

六 ポートレース

久米正雄

ポートレースの日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。學校の事務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた。それがいかにも晴がましく見えた。

午後になると、晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはた／＼と鳴らした。水路には可なり荒い波が立つた。しかしいよいよレースが始らうといふ頃になつたら、珍しい夕風ゆふなみが來た。

選手は皆樺色のユニフォームを着た。それが僕には何

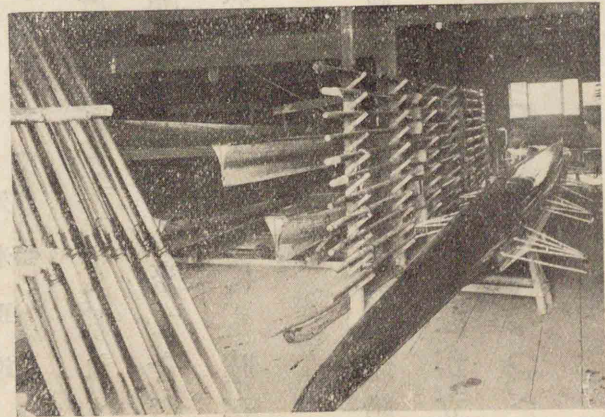
ユニフォーム
一定した競技
服。

だか身が緊つたやうに感ぜられた。土手では観衆が一種の尊敬と好奇の念をもつて、この樺色の衣服を着た選手たちに道をあけた。

味方の短艇がまづ拍手に送られて、臺船を離れた。二十本ほど漕いで、審判艇の差出す綱に繋留した。續いて紫の敵艇も繋がれた。

艇庫と土手と應援船とから、

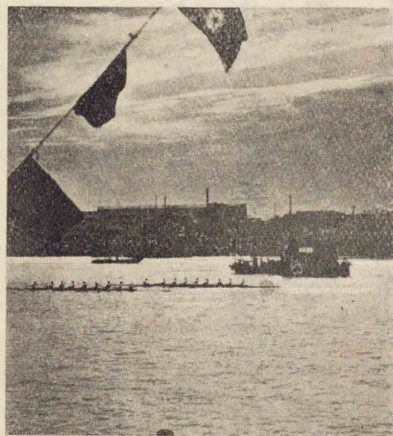
「樺あ。紫い。」などといふ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つ



艇庫の内部

の艇を曳いて、發足點へ向かつた。艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見わたすと、風は全く凪いであるのではなかつた。それは絶えず北東から吹いて来て、艇首を左へ曲げた。舵手の僕はそれを直すために、幾度も二番に軽く櫂を入れさせなければならなかつた。そのうちに、「用意」の命が下つた。艇首はまた一瞬間の強風に曲げられた。「え、まゝよ。もうなるやうになれ。」と僕は目をつぶつた。號砲が鳴りわたつた。用意と號砲との間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく長いやうに思はれた。二つの艇の櫂は同時に水に入つた。僕の目には、敵の艇と味方の艇の前方に白く光つてゐる水路の外何もなかつた。

シート
 手の腰掛にて漕
 席の轉じける
 距離をいひの
 の距離の標合
 とす。

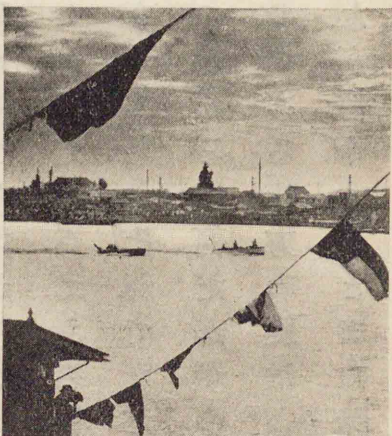


トーボ

味方の艇は、どうもすべり出しがよくなかつた。こいつ
 はいけない。皆あわてたな。」と思つた。敵艇を見ると、確かに
 一二シートはこちらより出てゐるらしい。ゆつくり。」と主
 將が叫んだ。僕は更に大きな聲でも、一度その言葉を全艇
 に傳へた。皆の調子がやつと合ひだした。この時、向ふの舵

手が、敵艇を抜くこと約半艇身。」
 と叫んだ。僕は忽ちその後を承
 けて、「嘘だぞ。」とどなつた。今まで
 黙つてゐた僕は、一度その言葉
 をいつてしまふと、急に口の緊
 りが解けたやうな氣がして、お

スプラッシュ
 櫂でうまく水
 が切れない水
 で、烈しく水
 面を打ち、水
 と煙をあけるこ



スーレ

と叫んだ。それを見たものも見ぬものも皆この言葉に元
 氣づいた。敵の艇は沈黙してしまつた。やつと二つの艇は
 並んだ。そして水門前で味方は約半艇身先んじてゐた。敵
 の舵手はそれでも、向ふはもうへたばつたぞ。」などといつ
 た。僕も「なあに、こちらが出てゐるぞ。」と應酬した。しかし心

そろしく雄辯になつた。そのう
 ちに敵の三番が一つ大きなス
 プラッシュをして、水煙が鮮か
 にぱつとあがつた。僕は機を得
 たといはぬばかりに、「やつたぞ、
 あんな大きなスプラッシュを。」

持には、ちつともそんな言葉戦をしさうな餘裕がなかつた。

水門まで來かゝると、僕は「さあ水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。いかなる舵手でもいふにきまつてゐる場所の指示を、敵艇の機先を制していふのも、一つの戦術であつた。早くいつた方が、遅くいつた艇より先にその場所に届いたわけだからである。遅ればせに敵は水門で特別な力漕を十本した。それでまた艇は並んでしまつた。後から追ひつかれると、何だかずつと追抜かれたやうな氣がするものである。味方の艇はいつもより船脚が遅いやうであつたが、暫くすると、また味方の艇がちり／＼抜きだした。僕

ピッチ
權の調子。

ラストヘビー
最後の力漕。

は「この調子で。」と叫んだ。敵の艇では沈黙してゐた。そして渡場での力漕十本は、もうこちらに對して効力がなかつた。主將は半眼でその力漕を見やりながら、やつと安心して、ピッチを上げだした。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。しかしこゝでの半艇身ばかりの差では、敵のラストヘビーが利けば、何の役にも立たない。僕は「あと一分だ。もう死んでもいいぞ。」などと激励した。この「あと一分。」といふ練習中に用ひ馴れた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくらへたばつても漕げるはずなのである。

皆は疲れて來た。すると、不思議に艇がよく出だした。味

方の艇は、疲れて來ると各個人の癖がとれて、全體としての調子が揃ふのである。協力がこの時始めて平均した。そして主將の權につれて、各は機械的に體を前後に動かした。

敵のラストも實によく出た。しかしそれを見て僕が氣遣つてゐる間に、味方の方のヘビーも非常によく利いた。多年の熟練で、主將のピッチがぐんぐん上つた。もう十本。決勝點に入るまでは、随分長く感じられた。僕はひよつとして、もう決勝點に入つても、審判の號砲が發火しないのぢやないかと思つた。その瞬間に號砲は響いた。皆は漕ぎやめて、艇内に身を伏せた。そして僕は始めてこの時、嵐の

やうな喝采が水上に鳴響いてゐるのを聞いた。それは決勝點に近づく時から盛に鳴つてゐたのであるが、僕の耳には入らなかつたのである。

「どつちが勝つたんだ。」と二番が苦しい息の中から情ない聲を出した。安心し給へ。僕等だ。」と僕は答へた。しかし僕自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして審判所に掲げられた樺色の旗を見るまでは安心がならなかつた。

喝采はまだ續いてゐた。今までに類のないほどの接戦であつたのが、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆をさへ熱狂せしめたのである。

セイロン島
イギリス領。

七 赤道祭

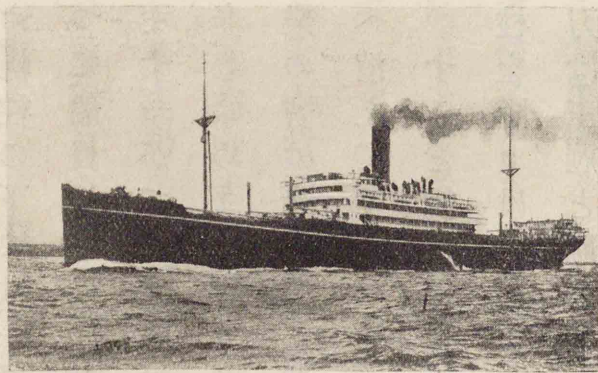
吉江喬松

世界の地圖を開いて御覽なさい。皆さんは印度の大陸の南の端にセイロン島といふ島があるのを見るでせう。こゝはお釋迦様のお生まれになつた所です。ヨーロッパへ行く日本の船は、ぜひ一度この島に碇泊します。そして印度洋を越えて、紅海からスエズ運河を経て地中海にはいるのです。

ケープタウン
イギリス領の
南アフリカ聯
邦の首都。

歐洲大戦の最中であつたから、私の船はこの途を通らないで、印度洋を南へ〜と下つて、アフリカ大陸の南の端、ケープタウンといふ町へ向かつたのです。十八晝夜の

間、空と水ばかりです。



ヨロパへ

一の帆柱の頂上に立ちます。すると、それに次いで、五人十

さて、船がいよ〜赤道を越えて南半球にはいるといふ日には、赤道祭といふのをするのです。

まづ船員でも、また乗客でもの中から、最も多く赤道を通過した経験のある者が選ばれて、海王にさせられます。この海王は華やかな衣服を着けて、腰に黄金造の太刀を佩き、頭に冠をいたゞいて、第

人の立派に着飾つた王の従者たちが帆桁マシの上に立ちます。帆柱の下には、一段高く王座がつくられ、それからさがつて、船長以下列座し、満員悉く静肅に甲板上に立つてゐます。やがて、軍樂隊は靜かに、また嚴かに「海ゆかば」の曲を奏し始めます。輝きわたる光の海、風のない波の上を、この樂の音は光の波と溶けあひ、もつれあつて、遠くへ四方へ消えてゆきます。

すると、帆柱の頂上の海王以下一行の人々は、靜かに帆柱を降りはじめます。錦欄の王衣は日に輝き、黄金造の太刀は王冠と照りあつて、海王は嚴かに空から降臨するのです。従者が先に、やがて王が甲板の上に降立つたと思ふ

と、今度は、君が代が奏しはじめられます。その樂の音の間に、海王は一行を従へて、しづくと設けの王座に坐ります。従者たちは、この王の周圍にそれ／＼座を占めて、或者は矛を、或者は旗を、或者は太刀を持つて、王座を取圍みま

す。その時、船長は列を離れて、恭しく王の前に出て敬禮をします。海王はその時、手にしてゐた卷物を船長の手へ渡します。船長は兩手でそれを恭しくいたゞいて、數歩退き、身を斜にして満船の人々に對し、その卷物を繰廣げながら、海王の言葉を讀みはじめます。それは、遠く故國を離れ、無事に赤道を越えて、この船は

いよ／＼南半球にはいつて行くのである。はてしない水の領土、未知の國が、その行手に待つてゐる。その未知の世界に翻る日章旗は、いつも勇ましい、いつも正しい日本人の氣象を示してゐる。いかなる國へ行かうとも、いかなる場合に出逢ふとも、日本人たるものは、この日章旗の示すやうに明らかで、大膽で、正直でなければならぬ。海上の王は今その日章旗の翻る船上に降立つて、自分の領土を開いて、喜んでこの正しい勇敢な日本人を迎へるのである。いよ／＼健かに、いよ／＼勇敢に、いよ／＼正當なものであれといふ意味を、嚴かに述べてあるのです。船長がそれを讀みをはり、卷きをさめて、海王に向かつ

て一禮すると共に、甲板上に堵列してゐる會衆一同も禮をします。それと同時に、今度は華やかな海上行進曲が奏しだされます。そして一同は「海王萬歳・日本帝國萬歳」と三唱します。はてしない水と光との洋上に、この萬歳の聲は遠くまで、何も遮るものもない遠い水平線上までも響いてゆきます。かうして赤道祭が一通り終ると、後は全船の人々によつて催されるさまざまの餘興が夜遅くまでも船中を賑やかします。その晩の食卓が美しく飾られて、非常な御馳走のあることはいふまでもないことです。

八 五月節句の教訓

萩野由之

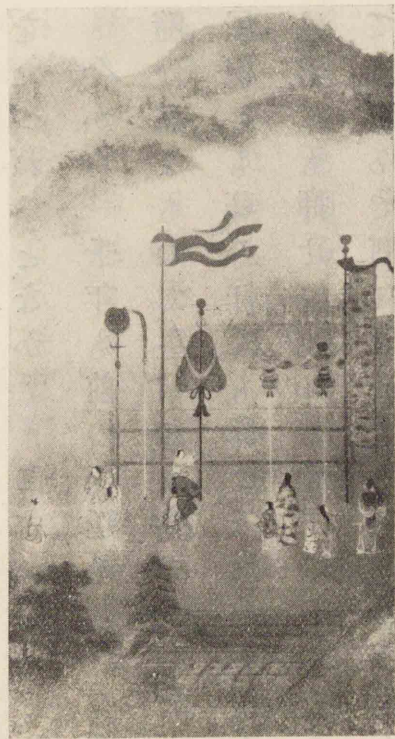
五月の五日は昔から貴賤共に祝ふところの佳節であつて、幼い男子のある家では、幟を戸外に立て、また武者人形などを飾る。なほ座敷幟と稱して、室内に飾るのは略式だが、あたかも三月の節句に、幼女のある家で雛人形を飾るやうにする。それゆゑ、五月の節句といへば、必ず幟や武者人形を聯想するであらうが、この飾物にいかなる意義があり、いかなる歴史があるかをいつてみよう。

五月五日を節句とすることは支那に始つたことだが、奈良時代に朝廷が盛に支那の制度・文物を輸入した頃か

ら、この習慣も共に附隨して來た。これが武家時代になつて全く日本化して、國民性を表す儀式となつたので、原因をたづねると、なか／＼に古い。

今から一千年も前の朝廷の五月五日の儀式といへば、随分盛なもので、皇室では諸方から獻ずる菖蒲を、御殿の屋根にも葺く。軒にも挿す。それで輿をも飾る。出入の人々は髪にも挿せば、袖にも付ける。寝る時の枕にも入れる。さては刻んで酒に入れて飲む。湯の中に入れて浴するなどといふ取扱で、この前後數日のうちは、全く菖蒲、即ちあやめの世界である。菖蒲が何故にかう繁昌するか。それはこの草の香が邪氣を避けるといひ傳へたからである。

なほ食物にもこの日の特色がある。それは粽ちまきで、團子を茅ちで巻くから「ちまき」といふのであらう。今日もこの粽を食ふことは、やはり病氣除けといひ傳へて、民間に行はれてゐるが、しか



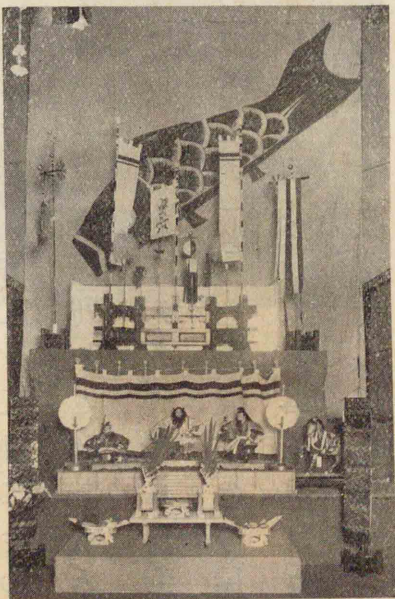
昔の五月節句(土佐光起筆)

し武家時代以後は多く柏餅と變じた。柏餅も畢竟は粽の一種である。

以上は五月節句の景物として、平安時代からの古い風俗だが、これに五月節句を代表して、純日本の慣習として

おもしろいものは武者人形である。そしてこれも古い歴史を有してゐる。平安時代の盛時において、朝廷の衛府ゑふといへば今の近衛師團といふやうな所、五月五日にその衛府の武官が武徳殿を裝飾し、甲冑を陳列して飾とすることが、仁明天皇の頃より歴史に見えてゐる。天皇も行幸して御覽になる。そのため七丈の假屋七棟、五丈の假屋七棟を設けたこともあるといふから、大した事と思はれる。これは禁中のことだが、民間では艾よもぎで人形を作つて戸口に立てたこともある。後には人々が艾では満足せず、本當の人形として張はり拔ひや木彫きぼりでこしらへ、甲冑も厚紙では満足せず、金銀の箔をおき、錦綾の切地で衣裳を作ること

になつたが、それは徳川氏三百年の太平に、人々が華奢にもなり、技術も精巧になつたからであらう。人形を家々の門前・戸口に立列ねたのは、平安時代の宮中で、甲冑を武徳殿の庭上に飾つた遺風と見えるが、後世、人形が立派になり、それを戸口に立てては都合が悪いので、室内に飾ることになつた。鯉だけは今も戸外に立てるが、幟はこれまた殆ど室内のものとなつて來た。粗大なものだんく織巧になる。半空

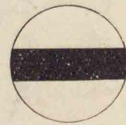
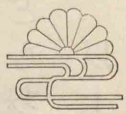


五月節の飾床



微風十五嵐燦石筆

に聳えた快活な幟が、引つこんで床の間の小天地にかゝ
まつてしまふのは、残念なことではないか。



またこの武者人形の飾に伴ふ幟には、必ず家の定紋
が染めてある。この定紋は紋所とも家紋
ともいふので、苗字に伴ふところの大
切な徽章である。例へば、楠木氏は菊水、新
田氏は一引兩、織田氏は揚羽蝶の紋、徳川
氏は三葉葵の紋と定まり、苗字と紋とは密接な関係を有
してゐるから、人の紋所を見れば、その家の氏がわかる。先
祖が知られる。戦争の時に、陣營にこの紋所をつけた旗を
立て、誰の陣所といふことを知らせ、入亂れ戦つても、背に

終南山
支那陝西省に
ある名山とい
ふ。南山ともい

さした旗指物の紋で、何人といふことが、見ず知らずの敵にも見當がつく。随つて、戦場に臨んで、卑怯の舉動をすれば、先祖の名折になり、家の名譽を汚すから、決して卑怯のことは家の紋に對しても出来ぬわけとなる。紋所の意味はかういふやうに深いものであるから、大切に守つてゆかねばならぬのに、近年は妄りに紋を代へてつける人などもあるのは、この意味を知らぬからである。

以上に述べた武者人形、甲冑の飾や幟などは日本的なものだが、その中に立つてゐる鍾馗は何かとの問も出るのであらう。これは全く支那傳來の物で、日本式ではない。唐の玄宗皇帝の夢に、このやうな姿をした人が來て、我は終

石川雅望
江戸時代末期
の文藝者で、
特に狂歌が得
意であつた。

南山の進士鍾馗といふもので、悪鬼をはらふ。といつたといふ傳説から書傳へたもので、中古、支那風俗が輸入された時の歸化物である。これにはあまり教訓の意味はない。



(筆安道田山) 馗鍾

石川雅望の狂歌に、

鬼すまぬ我が

大君の國にては

鍾馗の劍の

ぬきがひもなし

といふのがあるが、日本における鍾馗の地位をよく説明してゐるものといへよう。

九 初夏風景

徳富健次郎

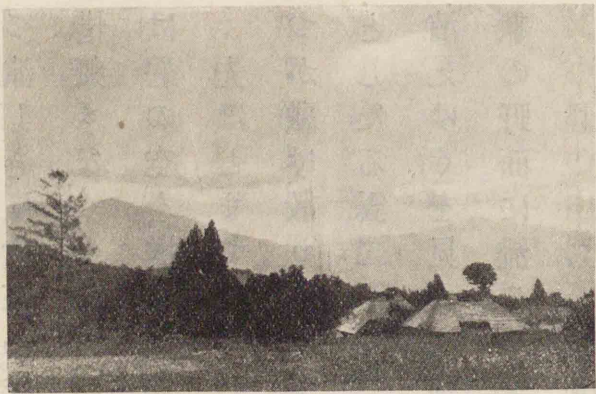
一 雨後の上州

伊香保を出でける頃、ほととぎす傘をたゞける雨は、澁川に到りてやみ、水濁れる利根を渡りて、前橋の方へ半里も行くほどに、雲は北へくとまき去りて、午日の光、雨の如く降来ぬ。

雨後、日光に輝くすべてのものの色鮮かなるを見ずや。見わたす限り海の如く茂りたる桑の若葉は、一葉々々に露を帯び、雨に洗はれ、日光を吸ひ、日光を吐きて、金緑色の焰赫々と燃え、晃々と照り、その間々には、大麥・小麥の白金

伊香保
榛名山の中腹
にある温泉
場。
澁川
榛名山の東麓
にある町。

妙義・榛名・小
野子・子持
すべて上州の
山々。挿畫は
伊香保から見
た小野子(左)
と子持(右)で
ある。



上州の山々

色の穂波を打たすあり。遠き近き新樹の村は緑を抽きて、大空の碧に映り、赤き五月鯉、白き矢幡は遠近にそよげり。その間々に、純碧の霞をかためたる如き妙義・榛名・小野子・子持の絶えなくに出づるを見よ。その山々の間に、越路の山の雪皎々と白きを見よ。このあたり人家の屋根には概ね菖蒲を植ゑたるが、折しも五月初旬のことなれば、濃き薄き紫の花、淺緑の葉まじりに簇々と咲出で、茅舎も花簪して立つ思あ

湘南
相模の海岸地
方の雅名にこ
の一篇には、こ
の風景が
運子か
満か
る。

り。
涼しき風吹來ぬ。桑の若葉は心地よげに身ぶるひして、
惜氣もなく金剛石の滴々をこぼし、人家屋頭の菖蒲の花
は、碧の空を撫でて、ふら〜うなづく。
先ほどまで空の一隅にうづたかく積みあつた雲の、い
つか融け、散り、流れて、今は風に梳かる、羊毛のふは〜
としたる雲二すぢ三すぢ碧空に舞ひ、それすら且流れ、且
消えゆくを見よ。心地よき眺や。露を拂ひて桑摘む少女が
歌の野面に流るゝを聞かずや。

二 湘南の日没

青葉茂りて、村々緑に埋れ、蘆伸びて、川狭うなりぬ。

小坪
飯島町の西、
飯島崎の海濱。

川の上流に立ちて、村のあなたに沈む日を見る。日は既
に小坪の山にかゝりぬ。潮次第に
満ちて、川さかしまに流れ、一川の
泡、雪の浮かべる如く、青蘆の影を
かすめて溯り行く。あなたの岸に
四手網あり。人は青蘆に隠れて見
えねど、その四手を引上ぐるごと
に、網は夕日を帯びて紫金色にひ
らめき、玉の如き水たら〜と川
に滴る。
やがて日は紅の球を揺かして山に落ちぬ。残照、林端の



川の子逗

空を紅にぼかし、水にもその色流れつ。潮はいよ／＼川に満ち、残照を浮かべ、青蘆の影を載せ、白き泡を運び、紺色の林影を浸して、漫々としてまさに小板橋を浸さんとす。時魚あり、林影の中にはねて、紺青の水に白き渦紋を湧かしぬ。

夕風そよ吹き、残照の影も次第に薄うなりぬ。蘆は影と一つになり、そよ／＼歌ひながら暮れゆく。いづこの寺の鐘か、淋しく野末をわたる。やがて、地は青黒う暮れ、人家の障子に燈火紅に見えそめぬ。



一〇 寓 話

楠山正雄

一 山と栗鼠

山と栗鼠がいひあひをした末に、山はうるさくなつて、「黙らないか。生意氣なちびめ。」とどなつた。栗鼠は負けずに、やりかへした。「それは僕は君のやうに大きくはないのさ。だが、君も僕のやうに小さくはないのだ。君は背中に森は背負つてゐるが、胡桃は割れまい。」

獅子が兎と友だちになつて遊んでやつた。兎は得意になつていつた。獅子なんて随分強い。せに、鶏が鳴くとおびえて逃出すつていふのは本當ですか。獅子は笑つて答へた。あゝ、さういふこともある。どうも大きな獣といふものは、ちよつとした事にこはがるものだ。だから、豚がうなると、象が駈出すのだ。すると、兎はますます得意になつて、嬉しさうにいつた。「あゝ、それでわかつた。我々兎仲間が、犬の聲を聞くと、逃げずにゐられないわけが。」



三 幸福の訪問

幸福はいつも王様や貴族の立派な御殿にばかりお客に行くとは限らない。それは氣が向けば、貧しい小家の窓をも、にこ／＼しながらのぞきこんで、氣軽く、「今日は、どうだね、暫くお客においてもらへないかね」といふこともある。

だが、幸福の訪問は人間の目に見えないし、お客に来てゐる間もごく短くて、どうかすると、五分か十分で歸つてしまふこともある。その僅かな間でも、幸福をお客様らしく大切に扱つたお禮には、それから何年もよいことが續く。その代り、その機會をはづしたら、もうめつたに二度と

幸福の訪問を受けることはない。

都の町はづれに古ぼけた一軒の小家があつて、そこに貧乏な三人の兄弟が住んでゐた。何をやつてみてもだめだ。幸福に見はなされたのだ。三人はてん／＼にかういつて、いつも幸福を怨んでゐた。

三人がいつまでも不幸でゐたので、幸福も氣の毒になつた。そこで、元氣をつけてやらうと思つて、或年の夏、そつと三人の小家を訪問した。そして夏ぢゆうずつとお客になつてゐた。

本當に夏ぢゆう幸福はそこにゐたのであつた。

さて、この珍しく長い逗留の間に、三人の兄弟たちの運

命にも、お互に隔りが出来た。

上の兄は貧しい小賣商人であつたが、幸福がお客に来てゐる間、せつせと商賣を勉強した。勉強して商賣をすればするほど、お金がまうかつて、とう／＼今では、この國に誰知らないもののない大金持になつた。

次の兄は役所に勤めてゐた。幸福がお客に来てゐる間、この兄は毎日の暑さにもめげず、せつせと仕事を勵んだ。そこで、一番身分の低い書記からだん／＼出世して、とうとう一番上の大臣にまでなつた。今では、大きな樹や、広い庭のある屋敷をいくつももつて、大勢の人に尊敬されてゐる。

ところで、末の弟はどうしたか。無論、幸福はお客に来て
ゐる間、この弟のためにも、それは寝る暇もないくらい働
いてやつてゐた。ところが、その夏、この弟は毎日ぶら／＼晝寝を
して、そのあひまに蠅ばかりとつてゐた。この弟はこれま
でも、蠅をとるのが格別上手であつたかどうかわからない。
とにかくその夏の間だけは、それこそ幸福が側について
ゐるおかげであらうか、それは百發百中といふやうに、手
をあげれば必ず一匹の蠅がとれた。さして、かういふわけ
で、してやるだけのことをして、十分満足したお客は——
幸福は、或日秋風が誘ひに来ると、氣

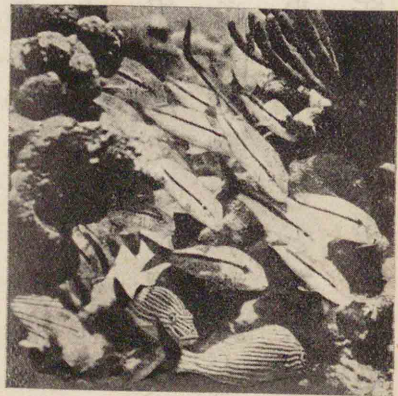
輕につれだつて、どこか遠方へ旅に出て行つた。
ところで、前にもいつたやうに、この後、三人兄弟の二人
までは、だん／＼運がよくなつて、お金持になり、大臣にな
つて、幸福の訪問を心から感謝してゐる。たゞ一人、弟だけ
は、自分一人幸福の訪問を受けなかつたといつて、相變ら
ず貧乏しながら、幸福を呪つてゐる。
でも、幸福は一夏、ぢゆう汗みづくになつて、一緒に蠅を
追つてやつたのに。

二 生存競争

丘 淺次郎

地球上には各種の動植物をして自由に繁殖せしむべき餘地は少しもない。そこへ各種の動植物が多數の子を生むのであるから、互の間に劇烈な競争の起るのは見易い道理ではあるが、その有様を詳しく論ずるには、まづ諸生物の生活する状態から考へてかゝらなければならぬ。動物の中には、獅子・虎・狐狸のやうに肉を食ふものもあれば、牛・馬・羊・鹿のやうに草を食ふものもあるが、獅子・虎などの餌となるものは、やはり草を食ふ動物故、動物の食物は、直接にか間接にか、必ず植物より取る外はない。又海産

の動物を見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふやうな具合で、どれもこれも皆肉食動物ばかりのやうであるが、最も小さな蟲類は、大洋の表面全體に浮いて生活する無限の微細藻類を餌にするから、この場合にも動物の食物の根元は、やはり植物界にあるのである。かういふ状態故、植物なしには草食動物は生きてゐられず、草食動物なしには肉食動物は生きてゐられぬ。草を食はなければ生



海 底

命が保てぬのが草食動物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は、初から毎日幾らかの草を犠牲に供するつもりでなければならず、又他の動物を食はなければ生命が保てぬのが肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は、初から日々幾らかの動物を殺す覚悟でゐなければならぬ。草と草食動物と肉食動物が相並んで、互に犯さず、共に生存してゆくといふことは到底出来難い事である。また長閑な春の日に、野外を散歩してみると、草木の青と茂り、花の美しく咲いてゐる所を、蝶がおもしろさうに飛廻り、小鳥が楽しさうに歌つてゐる。詩人はこれを詩に作り、畫家はこれを繪にかいて、共にこの世の楽しさを

ほめたゝへるが、それだけが實相ではない。少し丁寧に觀察してみれば、世の中は決してそんな無事平穩なものはない。鳥がこのやうに歌つてゐられるのは、今日までに數千萬の蟲を食殺した結果で、歌ひながらも、なほ蟲の命を取らうと探してゐる。また蝶がこのやうに舞つてゐられるのも、幼蟲の頃に澤山の菜類を食枯した結果である。さうしてあそこの樹の枝には、蝶を捕へて殺して食はうと、蜘蛛が巧に網を張つて待つてゐるし、この樹の梢には、小鳥を捕へて殺して食はうと、鷹が鋭い目を張つて狙つてゐるから、蝶の命も小鳥の命も、殆ど風前の燈火のやうに、少しでも油断すれば忽ち食殺されてしまふのであ

る。なか／＼氣樂に遊んでばかりはゐられぬ。動植物はすべてかういふやうに相殺し、相食うて、それで自然界の平均を保つてゐるのである。

かういふところへ、年々歳々、動植物の各種がおびたくしく子を生むのであるから、その多數は、無論他の動物のために餌として食殺され、もし生残つたものも、餌を得るために甚だしく相争はなければならぬ。動植物の繁殖力は實際無限であるが、それは代々生まれる子が悉く生存し繁殖するものと假定した上の事であつて、現在のやうに、生まれる側から、他の動物にその大部分を食はれてしまふ場合には、もとより著しい繁殖の出来るはずがない。

なほその上に、一地方における各種の動物の食物の總量には、自ら制限があつて、生残つたものが、皆我が望むまゝに食ふといふことは到底出来難い。假に、兎が一匹ゐるのを、犬が二匹で見つけたとしたならば、先に兎を捕へた犬だけは飽食し、後れた方は饑ゑねばならぬわけ故、いかなる動物も食ふための競争は免れぬ。また兎の二匹ゐる所へ、犬が一匹來れば、速く逃げた兎は生残り、遅い方は食はれてしまふわけ故、大抵の動物は、食はれぬための競争も避けることが出来ぬ。動植物共に各自皆食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬやうにと競争してゐるのが實際の状態で、これを生存競争といふのである。

一二 蜘蛛

岡本綺堂

庭の松と高野槇との間に蜘蛛が大きな網を張つてゐる。二本ながら高い樹で、ちやうど二階の鼻の先に突出てゐるので、この蜘蛛の巣が甚だ目障になる。私は毎朝拂ひ落すと、晝頃には大きな網が再びもとのやうに張られてゐる。夕方に再び拂ひ落すと、翌る朝にはまたもや大きく張られてゐる。私が根よく拂ひ落すと、蜘蛛も根よく網を張る。蜘蛛と私との鬪は半月餘りも續いた。私は少しく根負の氣味になつた。いかに鐵條網を突破しても、當の敵の蜘蛛を打亡さない限りは、到底最後の勝

利はおぼつかないと思つたが、利口な蜘蛛は小さい體を枝の蔭や葉の裏に潜めて、巧に私の竿や箒を逃れてゐた。私はこの出沒自在の敵を殆どもてあました。蜘蛛の敵は私ばかりではなかつた。或日強い南風が吹きまくつて、松と槇との枝をたわむばかりに振動かした。蜘蛛の巣も共に動搖した。巣の一部分は、大きな魚に食破られた網のやうに裂けてしまつた。蜘蛛は例のやうに小さい體を忙しさうに働かせながら、風に揺られつゝ網の破れを繕つてゐた。或日庭に遊んでゐる雀が物に驚いて飛びたつた時に、その廣げた翼は、ちやうど蜘蛛の巣に觸れた。鳥は向ふ見

ずに網を突破つて通つた。それから三十分ばかりの間、小さい蟲はまたもや忙しさうに働かねばならなかつた。蜘蛛は忠實な工女のやうに息もつかずに絲を織つてゐた。蜘蛛はよく働くとつくゞ、私は感心した。それと同時に、蜘蛛を驅逐することは所詮だめだとあきらめた。私はこの頑強な敵と闘ふことを中止しようとして決心した。私が蜘蛛の巢を拂ふのは、勿論いたづらではない。しかし命がけてもこれを取拂はねばならぬといふほどの必要に迫られてゐるわけでもない。單に邪魔だとか目障だとかいふに過ぎないのである。これがあつたからといつて、私の生活に動搖を來すといふほどの大事件ではない。

それと反對に、蜘蛛にとつては實に重大な死活問題である。蜘蛛が網を張るのは、いたづらや冗談ではない。生きんがために努力してゐるのである。蜘蛛は生きてゐる必要上、網を張つて毎日の食を求めなければならぬ。蜘蛛には生に對する強い執着がある。毎日拂ひ落されても、毎日これを繕つてゆく。恐らくいよゝゝ死ぬといふ最終の一時間までこの努力を續けるに相違あるまい。

私は蜘蛛に敵することは出來ないと悟つた。

小さい蟲は遂に私を征服して、私の庭を傲然として占領してゐる。

一三 山の牧場

前田鐵之助

夏の朝あけ、

私はすがすがしい山の牛舎で目覚める。

この晴やかにうつとりした心は、

涼しい微風にとける。

あゝ、山には靄が一面にかゝり、

やがてまた夢のやうに消えてゆく時、

山肌の草々は、

金色の陽に照つて揺れる

その緑のまぶしさ。

清らかな夏の朝よ、

山の上の牧場の明るい平和。

私は新鮮な牛乳を飲みながら、

晴々したこの牧場を眺める。

あつちにも、こつちにも牛が集つてゐる、

そして向ふには牛の群が丘を登つて行く。

番人について行く犬が、
きやん／＼後から吠えたてる
その甲高な聲が山に響いて、
かはいらしく聞える。
牝牛は林のそばにつながれて、
嵐のやうに鳴きたててゐる。
そして山の傾斜面の柵の中には、
おとなしい牛たちがゆつくりと
青葉を食べてゐる。

山全體は夏の陽に輝いて、
ひつそりと草にきらめく。
あゝ、何といふ平和な世界であらう。
私は限なく牛たちをなつかしむ、
そこの一軒家に働く人々をなつかしむ。
私たちは今山路を下つて、
そして人里に歸るのだ。
だが、この美しい平和な山の牧場は、
はつきりと心に残つてゐるであらう。

永祿

正親町天皇の御代。

佐々木承禎

室町時代の武將。名は義堅。

承禎は入道してからの號。

柴田勝家

織田信長の臣下として武功があつた。

長光寺

滋賀縣蒲生郡武佐村の字で、東山道の要路に當つてゐる。

一四 甕わり柴田

湯淺常山

永祿十二年、佐々木承禎、柴田勝家が守るところの長光寺の城を圍み攻めて、遂に總がまへを打破る。勝家、本丸にありて、こゝを先途と防ぎ戦ふ。

郷民、佐々木が陣に行きて、この城は水の手遠く、遙かなる所より水をとる候。それをとる切るほどならば、城は保つべからじ。と告知らせければ、承禎、喜びて、水の手をとる切つたり。城中、これに苦しめども、弱れる色をあらはさず。承禎、これを見んために、和平せんとて、平井甚介を使にして、城中に入れたり。平井、勝家に對面し、手水を請ふ。甕に水

満ちたるを、小姓兩人してかき出でたるに、平井、手を洗ひければ、小姓、残れる水を庭に捨てたり。平井、歸りて、かくといへば、事のたがひたるゆゑにあやしみあへり。かくて城中既に水盡きければ、勝家、明日は撃つて出で、切死せん。とて、諸士を集め、最期の酒宴す。残れる水を問へば、二石ばかり入るべき甕をかき出す。さらば、この間の渴をやめよ。とて、人々汲みのみてければ、勝家、薙刀の石づきにて甕を碎きたり。夜明方に門を開き、撃つて出づ。佐々木、思ひも寄らざれば、大いに敗北し、勝家、首八百餘級を得て、岐阜に獻ず。信長、感狀を與へ、賞せらるゝこと大方ならず。これより勝家を「甕わり柴田」と世に稱しけり。

一五 機智の話

生方敏郎

機智とは臨機應變に起つて來る智慧であつて、また別名を頓智ともいふ。速かにすぐ出て來る智慧のことだ。俗に「下手の智慧は後から出る」といふが、全くその通りで、智慧ばかりは、後から出たのでは間に合はない。

勿論、智慧にも、沈思黙考して出て來る智慧がある。これはまた非常に尊いものである。事業をなすにも、人と交際するにも、また演壇に立つて雄辯を振ふにも、この沈思黙考して得た智慧は最も大切だ。それは軍隊でいふなら、本陣といふところだ。大將は常にこゝにゐて、采配を振らな

ければならない。

しかしながら、戦は本陣ばかりでは出來ない。先鋒といふものも必要だし、遊撃といふものも必要だ。そこで、本陣を熟慮に譬へるならば、機智頓才は即ち先鋒であり、遊撃である。これがあつて、始めて敵と戦をいどむことが出來、また敵と戦つて奇勝を博することが出來る。

機智頓才はこれを行爲の上に表しても、または言語の上に表しても、一舉にして敵城を抜く底の効果を收めることが出來る。まづ行爲の上からその例を挙げれば、かのマケドニアのアレキサンダー大王などはその一人だ。大王はその世界征服の雄圖を抱いて、東征の旅に上つた途

マケドニア
ギリシヤの北
方に當り、今
はトルコの一
州になつてゐ
る。
アレキサンダ
ー大王
二十歳の時、
國王となり、
西暦前三三三
年、東征を企
て、印度にま
で及んだ。



王大—ダンサキレア

次、或國の都城へ行くと、その神社に太い繩を、何結びといふのか知らないが、非常にむづかしく結んだのがあつた。そしてこの結び繩を解きほぐすことが出来た者は、世界の勝利者であるといひ傳へがあつた。大王が將士を率ゐて、こゝに來ると、誰も皆大王がこれを解くことが出来るかどうかを非常に興味をもつて見たのであつた。ところが、大王は神官からその傳説を聞くとひとしく、

「よし、それなら、余は既に天下の勝利者となつた。」
といふが早い。か、右手に劍を抜いて、その結び繩を切つた。結び目は切れて、繩はばらばらにほぐれた。
これは何でもないことだが、ちよつと凡人の思ひつかないことである。かういふ場合、誰も皆頭でいろ／＼と考へ工夫して、指先でそれを解かうとするに違ない。それで、は決して解けるものではない。だが、この結び繩は劍で切つて解いてはいけないといふ條件はついてゐないのだ。だが、そこへは誰しも思ひつかない。アレキサンダー大王が劍でもつて解いたのを見て、
「何だ、劍で切つていいのなら、何でもない事だ。おれにだ

つて出来る。」

といふであらうが、もうそれでは遅いのだ。それでは、後から出る下手の智慧である。そんなのろまでは、機會の前髪を捉へることは出来ない。アレキサンダー大王なればこそ、人がどうにも手の下しやうのない時に、すぐに劍で切つて解くことを思ひつく。そこが英雄の英雄たる所以だ。國の東西を問はず、時の古今を論ぜず、すぐれた人間は常に、この機智頓才をもつてゐた。そしてそれを何事にも巧に應用して、その効果を収めた。平治物語を見ると、平治の亂に、平重盛は實に臨機の警句を發して將士を鼓舞し、戦勝を収めたことが記されてゐる。

「平治物語」
平治の亂の顛末を叙した物語。作者未詳。

熊野神社
和歌山縣本宮町にある國幣中社。

そも、この戦は、重盛の父清盛を始め、平家の一門が熊野神社に參詣するため、紀州に赴いた留守中に、源義朝等の企てた變亂である。旅先でこの變亂を聞いた平家の一門は愕然として驚き、そのなすところを知らなかつた。時に、機敏な重盛一人はおちついたもので、將士を勵ましていふには、

「皆の諸君、少しも心配することはない。この度の戦は必ず我々の勝利にきまつてゐる。なぜといつてみ給へ。時は平治であり、所は平安であり、我々は平氏である。これ即ち、天が我々に勝利を得させ給ふ證據ではないか。」と叫んだ。この言葉を聞いて、一門の將士は大いに喜び、俄

「源平盛衰記」
源平兩氏盛衰
の事實を詳述
した物語。作
者未詳。

に勇み立ち、盛に戦つて大勝利を得た。

實はこんな事は、理窟つぼく考へてみれば、何も時が平治であり、所が平安であり、自分が平氏であつたとて、それだから戦に勝利を得られるといふ根據ある理由はない。だが、かういふ戦争のやうな神經過敏になつてゐる際には、こんなちよつとした警句一つで、三軍の士氣は大いに奮ふものだ。これも戦が濟んだ後に考へ出したのでは何の役にも立たない。その機に臨み、變に應じて、口をついて出たからこそ、こんな偉大な効果を奏したのである。

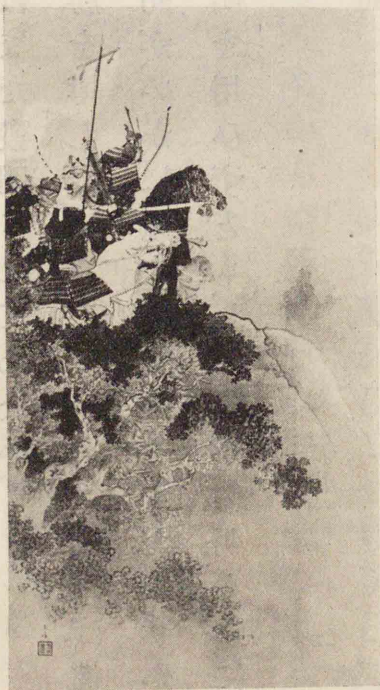
また「源平盛衰記」から源氏側に例を取つていへば、鴨越における義經の警句は、やはり偉大な勝利を味方にもた

らした。鴨越の難所を鹿が降りると聞いた時、義經は躊躇することなく、

「鹿も四足だし、
馬も四足だ。鹿
の通る所なら
馬の行けな
いはずはない。」

と叫んだ。これも

決して正確な論理ではない。しかしながら、この際、誰の頭にもそんな論理を働かさず、鹿の行く所、馬の行けない理由はないとして、味方の勇氣を鼓舞したところに、この警



(筆涯古代田) 越鴨

ナポレオン
十八世紀後半
初頭に於ける
英帝の位に即
した。

句の價值がある。

かのナポレオンが、常に連戦連勝を確信し、また自分の不死を信じて、

「余を殺す彈丸はまだ發明されてゐない。」

と叫んで、常に大勝を博した事など思ひ合はすれば、機智から生まれる警句が、いかに重大な効果をもたらすかが、くだくしい説明を用ひずとも、おのづから明らかになると思ふ。

一六 猫の失敗

夏目漱石

今夜こそ鼠を捕つて、家ぢゆう驚かしてやらうと決心した我が輩は、宵のうちから臺所に陣取つて、鼠の出るのを待つてゐる。あたりはしんとして、ゆふべのやうに柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。

戸棚の中でことくと音がしだす。小皿の縁を足で抑へて、中を荒してゐるらしい。こゝから出るわいと穴の横にすくんで待つてゐる。なかく出て来る氣色はない。皿の音はやがてやんだが、今度はどんぶりか何かにかゝつ

我が輩
猫自身を指す。

鮑貝
猫の食器。

出した。

今度は竈かまどの蔭で、我が輩の鮑貝なまがひがことりと鳴る。敵はこの方面へも来たなと、そつと忍足で近寄ると、手桶の間から尻尾がちらと見えたり、流しの下へ隠れてしまつた。暫くすると、風呂場でうがひ茶碗が金盥にかちりとあたる。今度はうしろだと振向く途端に、五寸近くある大きな奴が、ひらりと齒磨の袋を落して縁の下へ駈けこむ。逃すものかと續いて飛下りたら、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは、思つたよりむづかしいものである。我が輩は先天的鼠を捕る能力がないのか知らん。

我が輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駈出し、戸棚を



夏目漱石

たらしい。重い音が時々ごとくとする。しかも戸を隔ててすぐ向側でやつてゐる。我が輩の鼻面はなづらと距離にしたら三寸も離れてをらん。時々はちよろくと穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて、一匹も顔を出すものはない。戸一枚向ふに現在敵が暴行を逞しくしてゐるのに、我が輩はじつと穴の出口で待つてをらねばならん。随分氣の長い話だ。鼠は旅順椀の中で、盛に舞踏會を催してゐる。せめて我が輩のはいれるだけ、おさんがこの戸を開けておけばいいのに、氣の利かぬ山

警戒すると、流しから飛上り、臺所の眞中に頑張つてゐると、三方面とも少しづつ騒ぎたてる。小癩といはうか、卑怯といはうか、到底彼等は君子の敵でない。我が輩は十五六回はあちらこちらと氣を疲らし、心を勞らして奔走努力してみたが、終に一度も成功しない。殘念ではあるが、かういふ小人を敵にしては、いかなる名将も施すべき策がない。初は勇氣もあり、敵愾心もあり、悲壯といふ崇高な美しさへあつたが、終には面倒とばかりかかされてゐると、眠いのと、疲れたのとで、臺所の眞中に坐つたなり、動かないことになつた。しかし動かないでも、八方睨をきめこんでゐれば、敵は小人だから大した事は出來ないのである。目ざす敵と

挿畫は「我が輩の初刊本である」
紙の裏に「我が輩の初刊本である」
成五葉氏の筆に

思つた奴が、存外くだらない奴だと、戦争が名譽だといふ感じが消えて、憎いといふ念だけ残る。憎いといふ念を通り過すと、張りあひが抜けて、ぼーとする。ぼーとしたあとは、勝手にしろ、どうせ氣の利いた事は出來ないのだからと、輕蔑の極、眠たくなる。我が輩は以上の徑路をたどつて、終に眠くなつた。我が輩は眠る。休養は敵中にあつても必要である。

横向きに庇を向いて開いた引窓から、烈しい風の吹入ると思へば、戸棚の口から彈丸のやうに飛出したものが、



避ける間もあらばこそ、風を切つて我が輩の左の耳に食ひつく。これに續く黒い影は、うしろに廻るかと思ふ間もなく、我が輩の尻尾にぶらさがる。瞬く間の出来事である。我が輩は何の目的もなく機械的にはねあがる。満身の力を毛穴にこめて、この怪物を振落さうとする。耳に食ひさがつたのは、中心を失つて、だらりと我が横顔にかゝる。ゴム管のやうな柔らかな尻尾のさきが、思ひがけなく我が輩の口にはいる。究竟の手がかりに、碎けよとばかり尾をくはへながら左右に振ると、尾だけは前齒の間に残つて、胴體は古新聞ではつた壁に當つて、揚板の上にはね返る。起上るところを隙間なくのしかゝれば、毬を蹴たやうに、

我が輩の鼻面をかすめて、釣段の縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から我が輩を見おろす。我が輩は板の間から彼を見上げる。距離は五尺。その中に月の光が、大幅の帯を空に張るやうに横にさしこむ。我が輩は前足に力をこめて、やつとばかり棚の上に飛上らうとした。前足だけは首尾よく棚の縁にかゝつたが、後足は宙にもがいてゐる。尻尾には、最前の黒いものが、死ぬとも離れまいといふ勢で食ひさがつてゐる。我が輩は危い。前足をかけかへて、足がかりを深くしようとする。かけかへる度に、尻尾の重みで、淺くなる。二三分すれば、落ちねばならぬ。我が輩はいよいよ危い。棚板を爪で搔きむしる音が、がり／＼と聞える。こ

れではならぬと左の前足を抜きかへる拍子に、爪を見事にかけ損じたので、我が輩は右の爪一本で柵からぶらさがつた。自分と尻尾に食ひつくものとの重みで、我が輩の體がぎり／＼と廻る。この時まで身動きもせず、狙をつけてゐた柵の上の怪物は、こゝぞと我が輩の額を目かけて、柵の上から石を投げるやうに飛下りる。我が輩の爪は一縷のかゝりを失ふ。三つのかたまりが一つとなつて、月の光を豎に切つて下へ落ちる。次の段にのせてあつた摺鉢と、摺鉢の中の小桶と、ジャムの空罐が、同じく一かたまりとなつて、下にある火消壺を誘つて、半分は水甕の中、半分は板の間の上へころがり出す。すべてが深夜に、たゞな

らぬ物音をたてて、死物狂の我が輩の魂をさへ寒からしめた。

「どろばう。」と主人は胴間聲を張上げて寢室から飛出して来る。我が輩は鮑貝の傍におとなしくしてうづくまる。二匹の怪物は戸柵の中へ姿を隠す。主人は手持無沙汰に、「何だ、誰だ、大きな音をさせたのは。」と怒氣を帯びて、相手もゐないのに聞いてゐる。月が西に傾いたので、白い光の一带は半切ほどに細くなつた。

一七 犬ころ

二葉亭四迷

一

嬉しいにつけ、悲しいにつけ思ひ出すのは、親のこと……
…それにポチのことだ。

忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の春雨のしとし
とと降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り、宵
の口から寝てしまつたが、ふと目を覺すと、遠くで微かに
きやん／＼といふやうな聲がする。不思議に思つて、耳を
澄ましてゐると、次第に大きく、高くなつて、終には確かに
門前に聞える。かうなつてみると、疑もなく小犬の啼聲だ。

時々喉でも締められるやうに、けたたましくきやんきや
んと啼きたてる。その聲尻が、やがてかほそく悲しげにな
つて、めいるやうに遠い／＼所へ消えてゆくかと思へば、



二葉亭四迷

忽ちまた近くで堪へきれぬ
やうに啼きだして、くん／＼
と鼻を鳴らすやうな時もある
り、ぎやおと欠伸あ、びをするやう
な時もある。

私は元來動物好きで、就中犬は大好きだから、近所の犬
は大抵なじみだ。けれども、こんなかよわい、いたいけな聲
で啼くのは一匹もないはずだから、不思議に思つて、そつ

と夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寝られないのかえ。」

と、母が寝反りをうつてこちらを向いた。私はこの返答はさしおいて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて……なあに。」

「棄犬つて……誰かが棄てて行つたのさ。」

私は暫く考へて、

「誰が棄てて行つたんだらう。」

「大方どこかの……どこかの人さ。」

どこかの人犬を棄てて行つたと、私は二三度繰返してみたがわからない。

「どうして棄てて行つたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。どこまでも相手になつて、その意味を説明してくれて、もうおそいから黙つてお寝。」と優しくいつて、またあちらを向いてしまった。

私もまた夜着をかぶつた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなつた。寝られぬまゝに、私は夜着の中で、今聞いた母の説明を繰返し、味はつてみた。まづどこかの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。小さなむくくしたの

がかさなりあつて、首をもたげて、みい／＼と乳房を探してゐるところへ、親犬がよそから歸つて来て、その側へどさつと横になり、片端から抱へこんで、べろ／＼なめると、小さいから舌の先でたわいもなくころ／＼とところがされる。ところがされては大騒して起返り、またよち／＼とはひ寄つて、ぼつちりと黒い鼻面はなづらで、お腹はらを探り廻り、漸く思ふ柔らかな乳首を探り當て、あわててちうと吸ひついて、小さな両手でもみたて／＼吸出すと、甘い温かな乳汁ちゅうじがどく／＼と出て来て、喉へ流れこみ、胸を下つて、何ともいへずおいしい。と、腋の下から、まだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻面で割りこんで来る。とられまいとして、産毛の生え

た腕を突張り、大騒やつてみるが、とう／＼とられてしまひ、またそこらを尋ねて、他の乳首に吸ひつく。そのうちに、お腹も一ぱいになり、親の肌で體も温つて、とろけさうないい心持になり、ついうと／＼となると、含んだ乳首がぬけさうになる。夢心地にもあわててまた吸ひついて、一しきり吸ひたてるが、ぢきにまたたわいなくうと／＼となつて、乳首が終に口をぬける。ぬけても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。

その時、忽ち暗闇からもじや／＼と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐるところをむずとひつつかみ、宙に吊す。驚いて目をぼつちり

あき、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つてもがくうちに、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが出られない。暫くもがいてゐるうちに、ふと足搔かきが自由になると、襟もとをつかまれて、高い／＼所からどさりと落された。うろろろとしてそこらを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な所で、誰もゐない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間にぬれしよぼたれ、おそろしく寒くなる。身ぶるひ一つして、くん／＼と親を呼んでみるが、どこからも出て來ない。途方に暮れてよち／＼とはひ出し、雨の夜中をたゞひとり温かな親の乳房を慕つて、悲しげに啼廻る聲が、さつ

き一度門前へ來て、またどこへかさまよつて行つたやうだつたが、それがいつかまた戻つて來て、どこをどう潜りこんだのか、今は啼聲がまさしく玄關先に聞える。

「お母さん／＼、門の中へはいつて來たやうだよ。」

と、私がおだかゐた、まらないやうな氣になつて、また母にひかけると、母は氣のなささうな聲で、

「さうだね。」

「出てみようか。」

「出てみないでもいいよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ——あら、あんなに啼いてゐる……。」

と、折から絶入るやうに啼く犬の聲に、私は我知らずむつくり起上つたが、何だか一人では、こはいやうな氣がして、
「よう、お母さん、行つてみよう。よう。」

「ほんとにしやうがない兒だねえ。」

と、小言をいひく、母も澁々起きて雪洞はんぼりをつけて立上つたから、私もその後について、玄關——といつても、ついでの間だが、玄關へ出た。

母が沓脱くつはきへ降りて、格子戸の掛金をはづし、がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹きこんで、雪洞の火がちらちらと靡く。その時、小さな鞠のやうなものが、つと軒下を飛退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立ちなほつて、

一道の光がさつと戸外の暗黒を破り、雨水のところくりに溜つた地面を一筋細長く照らし出した所を見ると、ついそこに、生後まだ一箇月も経たぬ、むくくと肥つた赤ちやけた犬ころが、小指ほどの尻尾をちぎれさうに振りたてて、こちらを見上げてゐる。なりは私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨にぬれしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳からしづくを滴らし、ぼつちりと二つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや、まあかはいらしい……。」と、母もついいつてしまつた。況や私は犬好きだ。じつとして見てはゐられない。

母の袖の下から首を出して、ちよつと「と」呼んでみた。と、さほど恐れられた様子もなく、ちよこくと側へ来て、さすがに少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を下からぐいぐい押上げるやうにして、へろへろとなめ廻し、手をくれるつもりなのか、しきりに圓い前足を舉げて、ばたばたやつてゐたが、はてはやんはりと痛まぬほどに小指をかむ。



(筆集木村奥) ろこ犬

私はかはいくてくたまらない。母の顔を見上げながら、少し鼻聲を出しかけて、「お母さん、何かやつて。」と、やるもいいけど、ゐついでにしまふと仕方がないねえ。」と、口では拒むやうなことをいひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来てくれた。早速沓脱へ引入れてこれをあてがふと、小犬はちよつと香を嗅いで、すぐうまさうに、まづびちやくとなめだしたが、汁が鼻孔に入ると見えて、時々くしんくと小さくしやみをする。忽ち汁をなめ盡くして、今度は飯にかゝつた。他に争ふ兄弟もないのに、しきりに小言をいひ

ながらがつくと食べだしたが、飯はまだ食慣れぬかして、とかく上頤に引つつく。首を振つてみるが、そんなことではなか／＼取れない。はては前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大もがきにもがく。

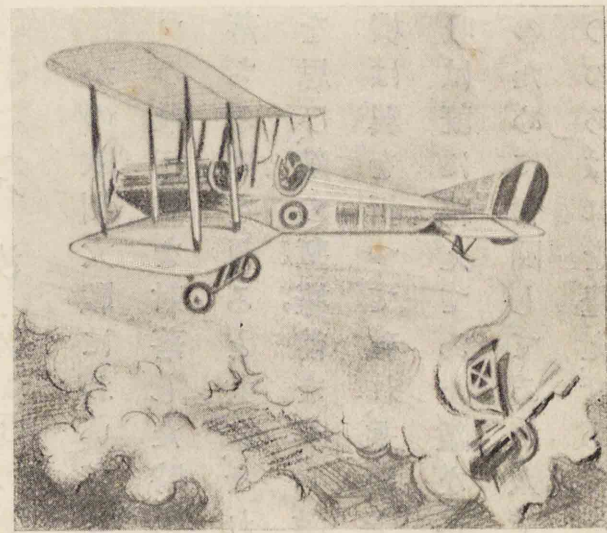
この隙に私は母と談判を始めて、今晚一晚泊めてやつて。と、雪洞を持つた手にぶらさがる。母はちよつと澁つたが、もうかうなつては仕方がない。お父さんに叱られるけれど、「といひながら、棧えん倭だ法師ほしを捜して来て、沓脱くわだつの隅に敷いてやつた。それはよかつたが、その晩一晚啼通されて、私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言をいはれたさうな。

一八 汝の母

姉崎嘲風

かの歐洲大戰において、イギリスの一飛行士官が、ドイツの飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地に落ちるのを見ると共に、それに乗組んでゐる敵兵のことを思ひ、敵の塹壕えんごう前ながら、敵機の後を追つて着陸した。敵機は翼を折つて破れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸は既に絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔して國のために奮闘してゐた人であつたと思ふと、そゞろにもこのあはれを覺え、せめてその遺骸なりと片づけてやらうと、胸のポケットの邊に手を觸れると、そこに一つ堅い

ものがあつた。これを搜り出して見ると一葉の寫眞で、そ



つて、なほ一戦したが、その日の戦にも、武運強く、安全に味

空 中 戦

れには女の手で「汝の母」と書いてある。即ち今戦死した士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏してゐたのである。士官は一層のあはれに堪へず、涙ながらにその寫眞を取收め、遺骸を味方の塹壕にもたらし、再び機上の人とな

方の戦線の後方に歸つた。

その夜、イギリス士官は、この射落した敵とその老母と
のことを思ひ、それにつけても自分の身の上、且は早くに
亡くなつた自分の母のことを考へて感慨に堪へず、寫眞
で知つた敵士官の住所、姓名によつて、彼の母へ一書を送
つた。その書面は次の通りである。

「私はイギリスの飛行士官です。今日、私は敵であるド
イツの一飛行機を射落して功名をたてましたが、その
敵兵が死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏し
てゐたのを發見し、その母御であるあなたにこの手紙
を差出します。

私が飛行機を射落したことによつて、あなたの御子息は生命を失はれました。しかし、その人を憎んだのもなければ、またその人の母御たるあなたのお悲しみを知らないはずもないのです。たゞこれが私の義務でした。敵士官、即ちあなたの御子息が、味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、その結果、味方は反對に攻撃を受けて、幾人かの兵は、そのために命を失つたでせう。この不幸を防ぐために、私は敵機を射落しましたが、その乗組士官の遺骸に敬意を表し、それを片づけようとする時に、その人の母御であるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時に母を亡ひ、今でも人に母があるのを見て、羨ましく思ふのですが、私の爲に生命を失つた敵士官には、あなたといふいとしい母御があり、死ぬまでその寫眞を抱いておられたのを見ては、私はじつとしてはゐられません。御子息を死なせた私の手紙を見ては、口惜しくもお感じになりませうが、私としてはあなたに對して、あたかも自分の母に對するやうな親しい感じを、悲しみの中にも禁ずることが出来ません。私の行爲は、御子息の生命を奪ひました。しかし今私があるあなたの寫眞を前に置いて、あなたにこの手紙を書く時には、亡き御子息があなたに向かつて話をしてゐられる

のか、また私が自分の亡き母に向かつて手紙を書いて
ゐるのか區別がつかず、筆先に涙が流れるばかりです。
私が御子息の生命を絶つやうな行爲を敢へてした
のは、公の義務のためです。あなたも、亡くなられたあな
たの御子息も、このことを思つて、私を赦して下さるで
せう。さうしてまた、御子息の亡くなられた代りに、私は
一人の母を得たやうな思をしてゐることを察して下
さるでせう。今私の書くこの手紙は、御子息と私と二人
の魂が、一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこ
れ以上には書けません。涙で眼は曇り、筆を執る手も顫
へてゐます。

この手紙は、イギリス軍の本營から、中立國の手を経て、
ドイツ國內のかの母の許に届いた。一人の子を亡つた母
がこれを読んだ時の心持は、思ふも涙の種である。さうし
てこの婦人は、數日の後長い手紙を書いて、かのイギリス
士官へ送つた。それは次の通りであつた。
「御手紙の着く前に、悴の戦死は知つてゐましたが、そ
の戦死の相手であるあなたの情深い御手紙を見た時
の私の思は、どんなであつたか、お察し下さい。通常なら
あなたを悴の仇としてお怨み申すところですが、御述
懐に接しては、その仇が却つて悴の蘇生となつて、この
母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが、

悴の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する
心持がするといはれるやうに、あなたの御手紙は、私に
とつては、戦死した悴の手紙としか思はれません。あな
たは悴の命を奪つたといはれ、また事實それに違ない
ことは知つてゐますが、命を取るも取られるも、共に各
の祖國の爲で、人として何等怨のあるわけでないのは、
お互に明白な事であらう。たゞ仇といふべきあなたが、私
を母のやうに思ひ、私もまたあなたが死んだ悴の身代
りのやうに思はれるのは、何といふ不思議な事であらう。
私には三人の男の子があり、戦死したのはその末子
ですが、兄二人もやはり戦線に立つてゐて、いつ弟と同

じ運命になるとも計られません。しかし私は、末子の戦
死したために、あなたといふ新な子を得ました。戦争が
済んで、平和の時が來、さうして兄二人も無事に歸るこ
とがあれば、私はあなたにもこの家へ一度來ていたゞ
きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎
へるであらう。その時には、あなたは死んだ子供とあなた
と二人分の子として、弟として、私の家庭にいつまでも
滞在していたゞきたうございます。その日の早く來る
ことを祈つてゐます。」
さうして最後には、寫眞に書いてあつた通りに、「汝の母」
としたゞめてあつた。

Aつき
野球試合に
おいて、最後
の得点の
多に、その
攻め方が、
合得点を残
す。A場
つきとな
る。

バット
野球用の打棒。
グローブ
野球用の手袋。

一九戦の後

西條八十

「一対八だよ、Aつきだよ、

勝つたよ、勝つたよ、

僕等の勝だよ、

我が校の勝だよ。」

バットを振りく、
グローブを投げく、
僕等は歌つた、僕等は踊つた、

赤い夕日の落ちゆく野原で。

踊つてゐながら淋しくなつたよ、

敵の投手のかはいい野崎が、

なんにもいはずにグラウンドに坐つて、

ほろ／＼泣いてたあはれな姿が、

ふと眼に浮かんで、淋しくなつたよ。

宥せよ、野崎よ、我が友野崎よ、

仲好同士で、今日闘つたが、

グラウンド
運動場。

おまへとおれとの勝負ぢやないんだ、
學校と學校の勝負だ、宥せよ。

心のうちではあやまりく、
赤い夕日の落ちゆく野原で、
僕等は踊つた、僕等は歌つた、
「勝つたよ、勝つたよ、一對八だよ。」

二〇 旅人となりて

吉田絃二郎

今朝八時半の特急で下關まで一氣に走ることになりました。避暑客や何かで込合ふことだらうと思つてゐましたが、さほどでもなかつたので大助りでした。

東京を立つた時は、珍しく細雨を見ましたが、横濱あたりからすつかり晴れて、またもとの蒸暑い天氣になりました。

青い山、青い畑が鐵道線路を挟んで迫つて來ると、溪間にも、野の面にも白百合がちらほらと見えます。葛の花や木槿の花が、畑にも、家のまはりにも咲いてゐます。空も山

國府津
神奈川縣國府
津町熱海線
の分岐點

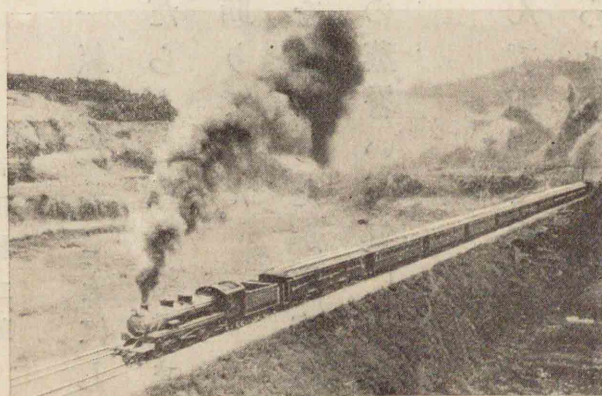
乙女峠
箱根の外輪山
の峰を越えて御殿
場に出られる。

カーペット
毛氈。

も流も光に輝いてゐます。眼を閉ぢて輾轉たる音を聴きます。汽車はひたすらに光の野を西に走ります。

國府津に着いて始めて海らしい海を見、山らしい山を見ることの出来たのは嬉しいことです。箱根や乙女峠には雲がかつてゐます。

箱根に入つて、さすがに高原らしい涼しさを覺えました。文字通りに青いカーペットを

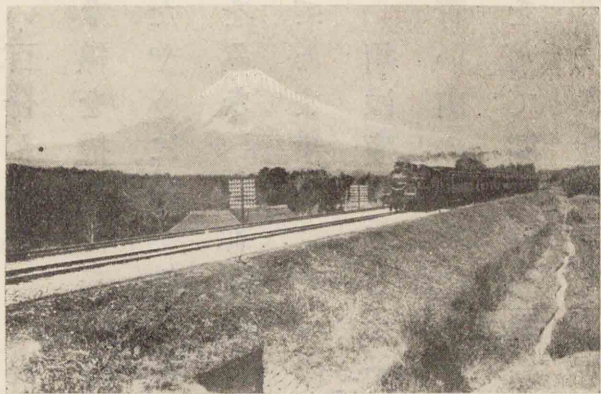


箱根に入つて

敷いたやうな裾野には、明方の星をばらまいたやうに、白い百合が咲きこぼれてゐます。線路に沿うた圓い柔らかな線を描いた丘には、離々たる青草の上に盛りあげられたやうにして白百合が咲いてゐます。ねむの花も石竹もをみなへしも一樣に青嵐の芳草のうちに夏の光を浴びてゐます。

川は瘦せてゐます。白い小石の上をすべる清冽な水は、青い山の根を縫うては青い嵐の中に隠れてゆきます。蓑を着て、深潭に釣糸を垂れてゐる男もあります。高原を走る汽車を見おろして、更に高い山道を歩いてゐる少年の群もあります。乙女峠には雨が降つてゐます。

「富士山は見えますか。」



裾野を走る

私は突然隣の男に沈黙を破られました。その男は始めて日本を旅行した臺灣人でありました。富士は雲に鎖されて見えません。私に對して氣の毒に思ひました。私は微かに雲霧の間にほの見えてゐる富士の稜線をたどつて、その男に富士の形を説明しました。

汽車は裾野を三島の方へ走つてゐます。時々横なぐり

三島
静岡県三島町
岐豆鐵道の分岐點

に時雨のやうに寂しい雨が降つて來ます。斜に打ちつけられた雨の脚がまだ乾ききらぬ間に、正午の太陽が焼くやうに硝子窓を射ます。けれども高原の風は青く薫つてゐます。

私は幾度か小さな行李の底から本を取出しました。しかし私はすぐ本を捨てました。どうしてこの偉大な自然から私の眼を離すことが出來ませう。

桑の畑、芋の畑、黍の畑を隔てて、汽車は富士を中心に大きな圓を描いて走つてゐます。黍の楮い穂の上に雲の峰がかゝり、四十雀の唄が聞えてゐます。

馬洗ふ里の子供たちの上に煙を残しつゝ、汽車は鐵橋

伊吹山 滋賀縣にあり、琵琶湖の東北の方。汽車は走る。南の裾を走る。

醒が井 滋賀縣坂田郡醒が井村の一驛として、古くからその名が諸書に見える。

芭蕉 徳川初期、元禄時代の俳人。姓は松尾、名は忠左衛門、俳聖の名を負うてゐる。

「夏草」の句 夏草やつばもあとのどが夢の

うと／＼と眠つてゐた眼に、紅い蓮の花の咲いた田が、長く／＼續いてゐるのが映ります。淡い薫が夢を誘ふやうに窓を襲うて來ます。一羽の白い鳥が紅い花の上を靜かに飛んで行くのが、靜かな抒情詩を讀んでゐるやうな心持をよび起します。

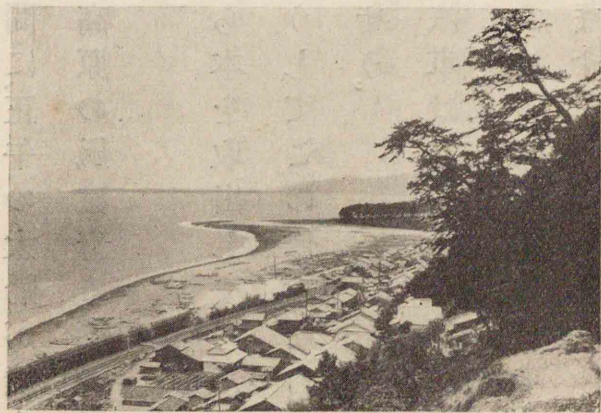
おひ／＼陽がかげつてゆきます。伊吹山の白く崩れた傾斜面が、午後の太陽をまともに反射してゐます。

關が原や醒が井などいふ聯想の多い驛の名が續きます。芭蕉の「夏草」の句を想はせるほど、山も平野も青々としてゐます。この附近から西は、野の百合が紅くなります。暗い杉の木立からは、こぼれるやうに蛸ひこの聲がします。

を渡つてゐます。

汽車は暫く澎湃たる駿河灣の岸に沿うて走つてゐます。方々に小さな水泳場が見えます。黍畑の續いた砂丘の上に、三色の旗が黒い海を背景にひら／＼してゐるのも見えます。

やがて汽車は變化の少い平原の町と水田とを貫いて走ります。中央山脈が、遠く紫の色に流れてゐる外には、光景は極めて單調なものになつて來ます。



駿河灣に沿つて

瀬田の流
勢多とも書く。
琵琶湖から出
て、末は宇治
川となり淀川
となる。

木の葉といふ木の葉は夕風に裏をかへして、全山を銀のやうに白くしてゐます。空は曇つて來ました。また嵐になりさうです。涼しい雨が斜に吹きこんで來ます。湖水に沿うた村々の家の白い壁に、力ない夕陽の影が動いてゐます。田や畑の隅々に小さな木立があつて、そこには青い竹で作られた撥釣瓶はたつづみがかゝつてゐます。若い女たちが二三人づつで耕作物に井戸の水を撒いてゐます。二段にも三段にも水車をかけて、池の水をかい出してゐるのも、水郷の感じを深くさせます。比叡の峰は曇つてゐます。黒い雲を破つて眞紅の夕焼が、湖面を壓するやうに燃えてゐます。瀬田の流に群をな

逢坂山
滋賀縣と京都
府との境にあ
る。



して白い鳥が眠つてゐます。

人々は靜かに湖の上を見てゐます。誰の顔にも一日の旅の疲が動いてゐます。

琵琶湖
逢坂山のトンネルを越えると、大きな角の牛がのそくと荷車を曳いて近江の方へ歩いてゐます。黄昏は牛の背に落ちかゝつてゐます。日はとつぷり暮れました。

も幾段にもかさなつて、流に沿うて映つてゐます。賀茂川

の灯、——人々は窓をあけて、闇の底に紅い灯を見出して
みます。

長いプラットホームに下駄の音が響きます。思ひなし
か下駄の音までがゆつたりと聞えます。

人々は大方出て行つてしまひました。新聞紙や折など
の散らかつた薄暗い室の中に、私はまだこれから先の二
百里あまりの旅路を想つてゐます。

さすがに旅らしいさびしさがどこことなく漂うてゐま
す。

槍が嶽

日本北アルプ
ス中の最高峰
で、その頂は
槍の穂がま
まになつてゐ
る。

梓川

源を槍が嶽の
雪溪に發し、
上高地にあ
る。美しい
風景を、
末は犀川に
入る。

二 槍が嶽へ

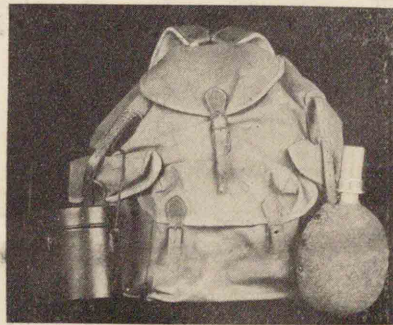
窪田空穂

梓川あづさがはのほとりの小屋に一夜を過した私たちは、しらし
らと空が明るくなるのを待つて、昨日のやうに一列をつ
くつて歩きだした。河原の石は、踏んで行く足の前に動い
てゐるやうに見えた。夜は全く明けはなれてゐた。河原が
盡きると、そこから雪溪が始つてゐた。

私たちはそこに立ちどまつてしまつた。河原を挟んで
峙ちつゝ續いてゐた二つの山脈は、今私たちの前面に俄
に起つて來た山に結びつけられて一つとなつてしまつ
た。二つの山脈のつくる溪谷は、一つの山の腹となつた。そ

してそこは一面に眞白な雪に埋められてゐるのであつた。河原と、河原を流れてゐた青い流とを呑んで、眞白な、ちやうど河原のやうな形をした雪溪は、可なりな傾斜をもつて、うね／＼と山をはひ上つてゐるのであつた。

雪溪は明るい晝の光にちら／＼ときらめいた。兩方の山は、山といふよりは、赤黒い一つの岩石の續きとなつた。そちらも、絶壁になつた所、裂目になつた所は、眞白な雪であつて、きら／＼と一層鮮かに輝いてゐた。奇怪な形をして、亂れ立つてゐる赤黒い岩



登山用具

石と、純白にきらめきわたる雪。雪と岩石との間には、白樺の樹立が縁のやうにつゞいてはゐたが、それは水に洗はれた後の川岸の草のやうに、鈍い薄青さを保つてゐるばかり、そしてまつすぐに立つことが出来ずに、低く一様に山裾に向かつて倒れてゐた。

青空は水に似て、力なく山のかなたに廣がつてゐた。平坦な河原に立つて、新にひらけて來たその光景を見上げると、私たちはまるで、晴れた空を襲つて來た夕立雲を見るやうに、面を打たれたやうに感じた。そこを占めてゐる荒涼の氣は、その中にはいつて行くものを、たゞは歸すまいといふ氣がした。見上げてゐると、見る／＼何等か

の變化が起つて來るかのやうにも思はれた。
案内者は雪溪の上を登りだした。荷物を小屋に置いて
來た案内者は、背中に着た幅の廣い羚羊かみしよの皮を見せて、の
そりのそりと雪を踏みしめて進んだ。

私たちも一列になつて従つた。寂しくついてゐる案内
者の草鞋の跡を踏んで、足もとを見つゝ歩みを移した。雪
は上面うへづらだけ融けかゝつて濕つてゐた。固くはあるが、すべ
るほどではなかつた。その上には、尖つた石ころが、撒散ら
したやうに雪に埋められてゐた。それは暴風のために山
頂から吹落されたもののやうであつた。

前後に左右に廣がつてゐる雪は、寒氣を吐いてゐた。足



雪溪の嶽が槍

裏に力をこめて一歩々と移して行く登りでありなが
ら、肌には寒さを感じて來た。草鞋と甲掛とをとほして、上うへ
融とした雪の水はしみ
た。杖を握つた手先も
冷たくなつた。

雪溪の眞中に、一つ
の大きな岩が突立つ
てゐた。息がはずんで
來た一行は、そこに立ちどまつた。岩の周圍だけ雪は融け
てゐた。その隙間から、雪の下に隠れた岩の肌が見おろさ
れた。しよろ／＼、しよろ／＼と、雪の下の眞暗な中から水

の音が聞えて來た。ぽち／＼と、雪の融けたしづくがその暗黒へ落ちてゐた。

勾配が急になると、雪は固くなつた。踏みしめた足はずるずるとすべつた。深い裂目を越さうとして跨ぐと、足の下は薄くなつてゐた。氷は、高い音をたてて割れた。

雪溪と雪溪の間に挟まつて、岩石の高まりがあつた。そこには薄い緑をした草が、低く、岩にしがみつくやうにして生えてゐた。そしてその草は皆花をもつてゐた。岩からすぐに咲いたやうに、ほのかな桃色をした花がむらがつてゐた。

私は立ちどまつて、花を指さしながら、一行の一人に訊

いた。

「何て花でせうね。」

「深山石南花といふんでせう。」

摘まうとして手をやると、何となく觸ることの出來ないもののやうな氣がした。その清らかさは、この深い雪の中に、かうして咲出るまでの隠れて費した力の程を思はせた。

と、その側に、アネモネに似た形をして咲いてゐる花が眼についた。

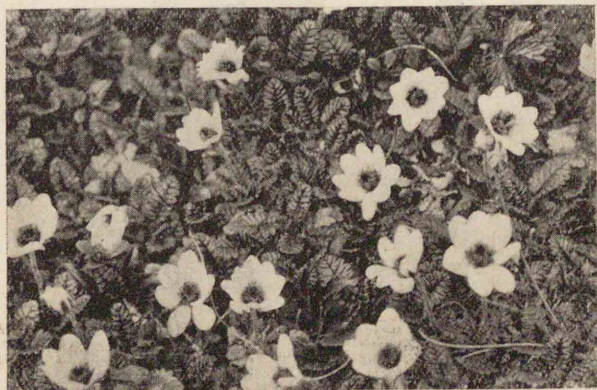
「これは何でせう。」

「長之助草といふんです。長之助つて男が始めて見つけ

「たとかいふんです。」

私はそれをもじつと見入つた。一行は歩きだしてゐた。雪溪の上に、ぼち／＼と小さく黒く立つてゐる三四人の人の後姿、それは寂しい極みのものに見えた。追いつかうとすると、足がすべる。息もすぐにはずんで来た……。

雪溪を越してからは、傾斜はますます峻しく、足もとはちやうど河原のやうに、大きな角石のつゞきとなつた。



長之助草



「頂上はまだ見えないかね。」

私は並んで歩いてゐる案内者に聞いた。

「あれが頂上ぢや。」

案内者は頭の上を指さした。

頂上と聞くと、一行は一時に聲

を揚げた。

「あれか。」

「ほう。」

私たちは足をとどめて見上げ

た。

頂上を仰いで

土に蔽はれて來た山は、今は黒い岩と、その上に生えた青黒く低い偃松よまきとだけになつて、仰向いて見上げるやうに俄に峻しくなつてゐる。その上に、ちやうど槍の穂先のやうな一つの岩が、一面に茶色に輝きつゝ、深く刻みついた襜たを濃い茶ににじませつゝ、その裾に、小さい缺石かひいの積みかさねを流し出しつゝ、頭上にひらけて來た青空を背にして立上つてゐるのであつた。

雪溪を登つて來しなに始めて逢つた風は、俄に荒いものとなつて來た。仰向いて見てゐる帽子の庇に吹きつける風は、頤の下でとめた紐を締めつけて、そして帽子を背中へ吹落した。吹募つて來る風の中に突立つてゐる絶頂

は、ばつと明るい茶色に輝くやうにも見えた。崩れ落ちはしないかとも見えた。一跨ぎに行かれるほどの近い所のやうにも見えた。

「お、富士。」

さういふ聲に振返つた。仰いで見てゐた山は、すべて眼の下に沈んでしまつてゐた。私たちの眼は、海の上を見わたすやうに、たゞ青いものを見るばかりであつた。その青いものの中に稍遠く、富士はその頂を眞青な空に現してゐる。その左にも、右にも、同じほどの大きさの山が、薄青い中に寂しく頭を並べてゐる。

「さ、もう一息だ。」

私たちは立ちどまつてゐるのがもどかしいやうにまた歩きだした。それは一步々、足を踏む所を見定めてから、やう／＼踏みかけるやうな峻しい岩の上であつた。そこにも、黄や白の花が丈低く、地にしがみついて咲いてゐた。息はすぐにはずんで來た。しかも風に吹かれて、手はかじかんで來た。頬は痛かつた。頭の上に見上げた絶頂は、歩いてても歩いてても同じ距離を保つてゐた。風はますます／＼荒くなつて來た。

三三 星

山本一清

天文家「よく晴れてゐますね。」

少年「ほんとによい晩です。一きれの雲もない、澄みきつた空ですね。それに、月もよい形をしてゐます。星も澤山見えますが、一體、この天にある星はいくつほどあるのせうね。」

天「今夜は月がありますから、小さな星はよく見えませんが、それでも、今かうして見えるだけで凡そ一千はあるでせう。御覽なさい、あの南の方は星が少いでせう。月があるからなのです。——しかし、こちらの北の方を見て

御覽、いくらか星の列び方が多いでせう。月さへなければ、今夜のやうなよい晩には、三千の星が見えるのです。――
少「三千ですつて。さうでせうか。私には三千や四千どころか、別に數へてみたことはありませんが、十萬も百萬も千萬も、天には星があるやうな氣がします……。」
天「ほんとにね、氣持だけはそんな氣持がしますが、論より證據、私どもは星の數を數へるといふことがよくあるのですよ。勿論、單なる暇つぶしではなく、或必要のために。――さうすると、人の眼で一時に見える星の數は、誰が見ても、まづ大體三千ときまつてゐます。尤も正確な

ことをいへば、今この場所のやうな、あちらに、あんな大きな建物があつたり、こちらに、こんな高い樹があつたりしては、せつかく見えるはずの星の一部を隠してゐますから、いけません。が、もつと四方が開けた野原の中にでも立つて見れば、天全體に、普通の眼で三千ぐらゐは見えるのです。――
少「三千ぐらゐでせうか。」
天「三千が少いと仰しやるのですか。三千は多い數ですよ。あなたは、實際、物の三千といふ數を目の前に見わたしたことがありますか。今は私どもの住む社會が大きいものですから、ちよつとしても、萬や億といつたやうな

大きな數を口にします。あの市の人口が何十萬だとか、軍艦一隻が何千萬圓だとかねえ。しかしこんな大きな數を、口では平氣でいひもしますが、實際これだけの數を眼の前に見せつけられたら、それはく、大びつくりですよ。——しかしそのびつくりする方が本當なのですからね。たゞ口先だけでいつてゐる人は、實は言葉で發音してゐるといふだけのことで、本當の物の數の觀念などはもつてゐやしませんよ。」

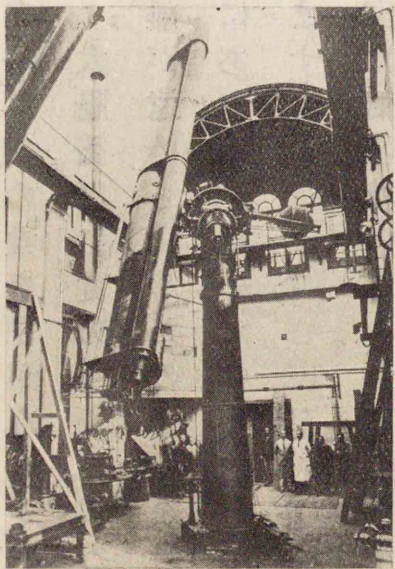
少「しかし望遠鏡で見れば、もつと澤山見えるでせう。」

天「え、さうですとも。人の眼に見えない星も、望遠鏡ならば澤山見えだしますから。」

東京天文臺
東京府北多摩
郡三鷹村にあ
つて、こゝの
望遠鏡は東洋
一の稱がある。

少「一體、天には總計いくつの星があるのです。望遠鏡を大きくすれば、限なく澤山見えるのですか。」

天「まあ大體、さう考へておけばよろしい。雙眼鏡で見ただけでも、肉眼で見た星の五倍や六倍は確かに見えますしねえ。直徑四インチの望遠鏡ならば、既に百萬以上の星が見えますし、世界第一の直徑何十インチといふ望遠鏡ならば、少くとも五六千萬の星が見えます。」



東京天文臺の望遠鏡

少「星は一體、どんなものですか。」

天「星は一つ、太陽と同じやうなものです。尤も、水・金・火・木・土の五星などは地球の兄弟分ですが、それでも木星は地球の十倍、土星は九倍以上の大きさがあります。しかし他の星は一つ、太陽と同じ實力をもつてゐるものなのです。たゞ距離が遠いといふこの單一な事情のために、實力は非常にありながら、一々の星はあんな微かな光で輝いてゐます。」

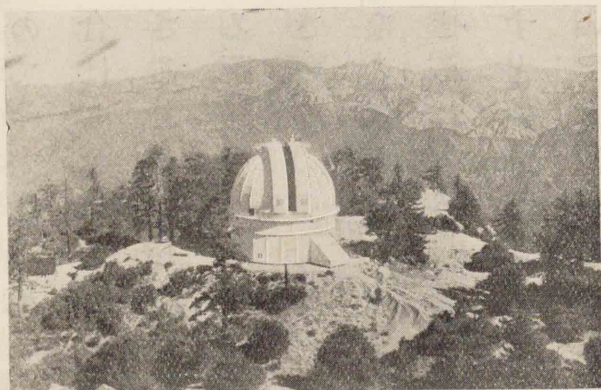
少「あゝ、大きい。天文家は、何に就いても、すぐ大きなことを仰しやる。私はいつも聞く度ごとに、『本當なのだからか。』とひそかに疑ひたくなります。この天に列ぶ大星

も小星も、すべて一つづつ、あの絶大な太陽と同じもの

であるとは、何から割出したことか知りませんが、随分思ひきつたいひ方ですね。」

天「はゝゝ、思ひきつたといひますか。しかし私どもは決して誇張したり、おどかしてゐるのではありませんよ。すべての今の學問は、證據がなければ、どんな些細な事でも決して

いひきらないのです。單なる想像は、今日の科學には大



メアリウソク天文臺

ウイソク天
文臺
カリフォルニア州にあり、
世界一の誇つてゐる。

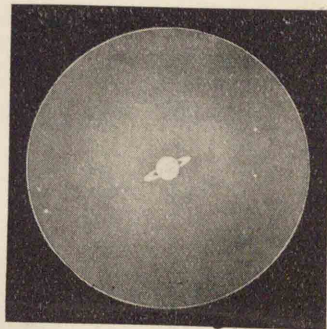
禁物です。それだけ、科學の結論には信用があるはずなので。太陽と星とが同じ實力のものであるといふ場合に、これほど違のあるものが、……とびつくりして下さるよりも、むしろ、等しいものをこれほどの遠に見せる距離そのものの大きいのを、改めてびつくりして下さい。」

少「なるほど、びつくりの仕方まで教はらなければなりませんね。しかし私はこんな話を聞いたり、考へたりしますと、何だか、この自分といふものが、いかにもつまらないやうに思はれてなりません。小さな世界に生きて、毎日、限られた場所に、限ある力をもつて、まことに些細な

ことに心を奪はれながら生活を續けてゐる。お互に同じやうな人間同士であればこそ、笑つてもみたり、怒つてもみたり、喜んだり、泣いたりやつてみますが、一旦空を仰げば、そこには絶大な天空が我々に臨んで、——別に言葉はありませんけれど、これを見よとばかり、我々を壓迫してゐるやうに見えます。時の流といふことにしてみたところで、我々の一生は、せいゝ、百年、この百年を萬倍か億倍かしたものが、我が地球の壽命だと、あなた方は仰しやるのですが、そのまた地球が太陽や外の星々の附屬物に過ぎないとしてみれば、あの天に見えてゐる微かな星一つにしても、全く想像することの

出来ない永い生命をもつてゐるのですねえ。」

天「いや、さうまた悲觀したものではありませんよ。そりや、いかにもあなた仰しやる通り、宇宙の廣大無邊に比べてみれば、人一生の生命ははかないといへばはかないに相違ないですが、それだからといつて、我々はこの大自然の前に、徒に屈從してゐるべきものでもありませんよ。天は大きなもの、時は無窮なものとはばかり考へてみれば、人の一生はまことにつまらない、何のために生きてゐるのかと嘆じられることもありませうか。」



望遠鏡で見えた土星

ど、私の考へるところは少々違ひますね。天體の形だけを見て、おどかさるのでなしに、學問をして、あの天體の中に秘されてゐる大きな意味を見出す時に、そこにもはや驚や悲しみはありません。例へてみれば、あの大きな天體の一つ一つが毎日どんな運動をしてゐるか、この一つの問題を考へただけでも、小さなこの人間一人一人が、觀察と努力とによつて、天體運動の眞相を看破ることが出来るといふことは、これは實に人間の喜であり、誇ではありませんか。」

二三 漁火

相馬御風

夜ごとに沖にともる漁火——それは海邊の夏における最も趣の深い景物の一つである。夏の夜の越後の海に見える漁火は、主として烏賊釣舟のともす火である。越後では夏の初から秋の半ば頃までが、烏賊の漁獲期となつてゐる。大概の漁村では、夏ぢゆう烏賊釣に出る。毎日午後三時頃から準備を始めて、四時から五時の間に舟を乗出す。近くて一里、遠いのは四五里も沖へ出なければ烏賊は釣れない。四時か五時に舟を乗出しても、場所に着くともう日が暮れる。そして夜明まで仕事を續けるのである。

夕暮近い海に沖へくと出て行く白帆の群、朝の光に



北國の漁村 (六烟愚行筆)

照らされながら沖から歸つて來る白帆の群、そのいづれにもそれづゝの風情がある。しかし暗い夜の沖に、水平線上に一列に並んでゐるかのやうに見える漁火の列を磯邊から眺めるのは、一層趣が深い。波の高い日には、沖の漁火は絶間なく明滅を繰返す。夜の磯邊で沖の漁火を眺める心持は、美しいと感じなが

らも、そのうちに何ともいへない寂しみと哀愁とのこもつた心持である。わけてたゞ一人で眺める場合は、一層その感が深い。沖で働いてゐる人たちは平氣であらうけれども、陸から眺める私たちは、時として彼等の心の中までをさまざまに忖度して、一味の涙ぐましさを覚える。

くらい、さびしい

よるの沖、

いかつり舟の

灯が見える。

どれがおうちの

舟だらう、

いくつもく

灯が見える。

うちの父さん

眞夏でも、

沖はさむいと

いつてゐた。

時々波に

かくれては、

ちらく舟の

灯が見える。

沖の漁火を夜ごとに陸で眺めてゐるであらう彼等の
家族の心をさへも忖度して、時にはこんな歌まで作つて、
獨りしみくとそれを眺めやることがある。

土用の明ける頃から、越後の海はそろ／＼波の打ちや
うが秋めいて来る。夜空の色も黒みが深くなり、星の光も、
銀河の明るさも、夜ごとに寂しみを増してゆく。それにつ
れて沖の漁火の明滅もせはしくなり、暮れゆく沖邊をさ
して出て行く白帆の風情にも、日ごとに寂しさうな趣が
加つてゆく。夜の中に突如として吹起る颶風のために、烏
賊釣舟の難破するのも秋口に最も多い。私も幼い頃から
幾度となくさうした天災に苦しんだ人々の遭難の實況

を見聞して來た。近隣の人々の中でも、幾人海で死んだか
わからない。それ等に就いての悲しい話もいくつとなく
私は知つてゐる。

心なくして夏の夜の海に無數に並んだ漁火を眺める
人には、それはたゞ美しい景物としてのみ喜ばれるであ
らう。そして涼しい海上で、夏をも知らずに夜を明す人た
ちの楽しさが、時には羨ましく思はれもするであらう。し
かし幼い頃から、海で働く人たちの悲しい運命のいかな
るものであるかを見聞して來た私たちには、暗い沖邊に
明滅する漁火を、たゞ單純に美しいものとしてのみ眺め
ることが出来ないのである。

葛飾の眞間
千葉縣市川町
の字。葛飾と
はこのあたりに
一帯の稱であり
銚子
利根縣銚子町
千葉縣銚子町
利根縣銚子町
川ついで銚子
江の邊から銚
利根川を流る
り。利根川が
川に流入する
こと。銚子
銚子
銚子

二四 歌ごころ

北原白秋

心柄といふものは、ほんのちよつとした言葉の端にも
あらはれるものである。
私が一夏住んでゐた葛飾の眞間の寺の坊さんに、或時
銚子行の川蒸氣の話が出たので、こゝから銚子まではよ
ほどでせうね」と訊くと、「いや、大した賃錢でもありません。
と坊さんが答へた。私は里數を訊いたのに、坊さんは大變
なことを答へたものである。坊さんはこの一言で、飛んで
もない俗僧であることを私に知らしてしまつた。
だから、その後、その坊さんが、田圃の蛙が鳴いたら、石

古池や
芭蕉の句。

油をぶつかけなさい。」といつてくれた親切な言葉にも、私
はさほどに驚きはしなかつたのである。
古池や蛙飛びこむ水の音
大變な違ではないか。

また或時、或三人の男が膝を交へて坐つてゐた。その時、
バナ、をお盆に山ほど女中が持つて來た。そのバナ、は
まだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が「はあ、いいな。」とい
つた。一人は「だめぢやないか、青いな。」といつた。一人は「全く
小笠原のは値ばかり高くてね。」といつた。三人とも親しい
友だちだつたが、一人は畫家で、一人は商人、あとの一人は
そのコーヒー店の主人だつた。畫家はその時、色の輝きを

観た。商人は味を感じた。そしてその店の主人公は値を考へて、一緒にはつと思つたのである。この中の誰の心が一番尊く磨かれてゐたか。

畫家は無論、輝いた青い色を観たばかりではあるまい。その輝きの底に潜むバナ、の生きた命そのものをも觀とほしたに違ない。

また、かういふことがあつた。或歌自慢の人が、眞間にたづねて來て、私に歌を見てくれといつた。私はまあ散歩でもしてみようと、一緒に外につれ出したものだ。その人は途々何かしらしゃべくつてゐたやうだが、私は夕方の空や、田圃の景色にばかり眺め

入つてゐたのである。

まだ赤い夕焼が西の空には残つてゐた。眞間の小川の土手の上を歩いてゐると、ふとその人がしゃがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何といふ可憐な繪模様だつたらう、私は思はず立ちどまつてしまつた。

そこには鮮かな裏白の葉の河楊かばやうが水の面おもてに揺れてゐた。そのたわんで揺動いてゐる一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽とまつてゐた。また一羽來た。枝はいよゝゝ揺れる。枝の先は水について、波を立ててゐる。燕の子たちは、紅い頬を揃へて、さもゝ恐しさうに啼きたてる。また一羽とまると、枝はいよゝゝ揺れだした。ともすると、すべ

り落ちさうになるので、今は必死となつてすがりついて
ゐる。その艶々した黒い尾羽、いたいけな啼聲。それだけで
も、かはいいのに、また一羽羽ばたいて、つい近くまではや
つて来るが、枝の上の燕の子はそれを見て、あわてて、いけ
ない、いけないと啼く。これ以上とまつては、枝がすつかり
水につかつてしまふのである。空の一羽はとまるにはと
まられず、寂しさうに啼きながら翔つては近寄り、近寄つ
てはまた翔りだす。

その燕に向かつて小石を投げたのである。

私ははつとしたが、それでも黙つてゐた。寂しい氣持で
ほゝゑみながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さうし

て或所までその人を送つて行つてから、「さやうなら、また
お出でなさい」とわかれの握手をした。それで歌はとうと
う見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけの歌かわ
かつてしまつたのである。無論、どれだけの歌を作る人か
もわかつてゐる。

なぜか。

それは、その一事で、その人の人柄がまだ出来てゐない
といふことが、はつきりと私にわかつてしまつたからで
ある。心が出来なければ、歌は出来ない。

二五月雪花

芳賀矢一

春はハナミ、夏はスゞミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のミだけが月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼はまた格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、一般國民的の雅興である。お月さまいくつ。の俚歌、雪よふれ。の童謡、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんでゐるのである。

月雪花を見て美を感じるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐人も高麗人も美しいとい

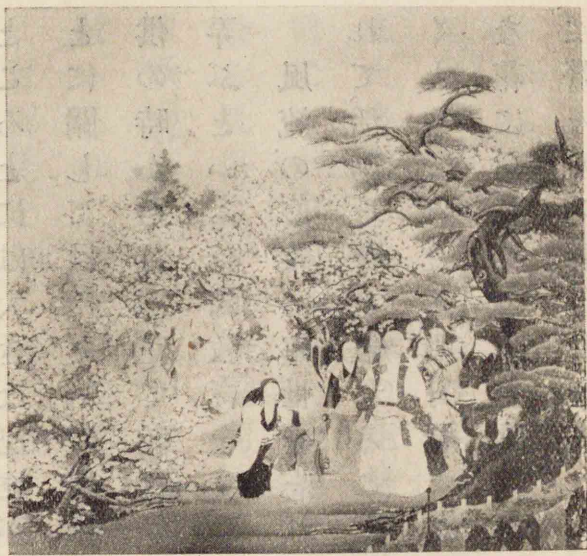
ふに違ないが、彼等の感ずるところと、我が國民の感ずるところとは、大きな逕庭がある。西洋人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をももつてゐない。我等は子供の時から月雪花で教育されて大きくなつた。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて、活動社會を離れることは、隱遁者の所行であるが、少くとも皎々たる明月、皚々たる白雪、雲のやうな霞のやうな花に對して、これを眺めてゐる間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の效用は美術と同じく、人を高尚にし、人を溫雅にし、人を悠揚にする

はすべてこの喩^ひ譬^ひ法を用ひてゐる。

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々の美德を附加する。無情の物を有情化した上、更にこれを有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと熟語されて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲は、その光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。また雪は、氷潔一點の塵のないことから、冷たい嚴肅なところを見て、潔白な精神や、節操の動かないことを聯想する。花は爛漫たる美しさの忽ち風に散りゆくのを惜しんで、節義の士が身命を抛つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の徳を備へてゐるやうに感ず

のである。



(筆嶺春塚大) 見花の閑太豊

して繁榮隆昌・幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠

我等日本人は古代から月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。月に叢雲、花に風、月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉^さ跌^たや死去に譬へる。さう



繪襖寺心妙

見月の昔

保己一
徳川後期の國
學者。姓は堀。

南殿
紫宸殿のこと。

るのである。古人がかう感じて來たそのまゝを我等は承
繼いで、我等もさう感ずるのである。

月雪花を觀賞することの出来る我等は幸福である。盲
人の學者保己一の逸事として傳はつてゐる話に、或時月
に對して、

花ならば探りても見んけふの月
といつた。また京都に上つた時、御所の南殿なみだんの櫻の花盛と
聞いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな
と戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、
言の葉の及ばぬ身には目に見ぬもなか

よしや雪のふじのね

といつた。

月雪花の眺をほしいまゝにすることの出来ない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加された傳説をもたない民族も、また人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出来る。月雪花を通じて、我が國民の歴史は髣髴として眼前に浮かぶのである。保己一は肉眼をもつての月雪花は見なかつたが、心眼をもつての月雪花は眺めることが出来たのである。

二六 我が幼時

新井白石

我が六歳の夏の頃、上松といひし人の少しく文字などありしが、七言絶句の詩一首教へて、その意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも講じ聞かせたりき。この兒、文才あり、いかにも師を選びて學ばしめらるべし。など、かの人もいひしかど、かたくななる昔人たちのいひしは、昔よりいひ傳へし事あり。利根・氣根・黄金の三こんなくしては、學匠はなり難し。といふなり。この兒、利根こそ生まれつきたらめ、なほいとけなくして、その氣根のほどもはかり難く、家富めりとも見えね

父 新井與次右衛門正濟
戸部 上總國久留里城主土屋民部少輔利直

ば、黄金のことも心得られず。などいひあへりしに、我が父も「戸部の御いつくしみによりて、常に傍を離れまゐらせず。學に入れ、師に従はしめんこともかなふべからず。されど、いとけなきよりも、書く



新井白石 ことをば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめてものをば書習はしめたくこそはべれ。とて、我が八歳の

の秋、戸部の上總國に行き給ひし後にて、手習ふことを教へしめらる。その冬の十二月半ば、戸部歸り參り給ひしかば、常に傍

にさぶらふこともとの如く、あけの年の秋、また國に行き
給ひし後にて、課を立てられて、日のうちには行草の字三
千、夜に入りて一千を限りて書出すべし。」と命ぜられたり。
冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだ満たざるに、日暮
れんとすること度々にて、西向きなる竹縁のある上に机
を持出でて、書終へぬることもありき。また夜に入りて手
習ふに、睡の催して堪難きに、我につけられし者とひそか
に謀りて、水二桶づつ、かの竹縁に汲置かせて、いたく睡の
催しぬれば、衣ぬぎ棄てて、まづ一桶の水をかぶりて、衣う
ち着て習ふに、初は冷やかなるに目覺むる心地すれど、暫
し程経ぬれば、身あたゝかになりて、またく睡くなりぬ

れば、また水をかぶること前の如くす。二たび水をかぶり
ぬる程には、大やうは課も満てたりき。これ我が九歳の秋
冬の間の事なり。

かゝりしほどに、この頃よりは、我が父の人に贈り給ふ
文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立
てられて、「庭訓往來」を習はしめられ、十一月に至りて、十日
のうちに淨寫してまゐらすべし。」と命ぜられ、命ぜられし
如くに事を終へしかば、冊になして戸部に見せまゐらす。
ほめ給ふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈
答し給ふほどの文ども、大方は我に命ぜられき。

また十一歳の時に、我が父の友に關といひし人の子ど

「庭訓往來」
吉野朝時代の
文法師の作
つたものとい
ひ、徳川紙に
ひたして、寺
に書かされた
時代の教科書
としての用

もは、太刀打のわざにすぐれて、人に教ふる事ありしを、我にもこのわざ教へられんことを望みしに、「わぬしいまだ幼し。これ等のわざ學ばんことをなほ早かり。」といふ。さこそはべるべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀脇差、腰にせんことまことに不用のことにや。」といひしかば、「のたまふところまことに然なり。」とて、一つのわざを傳へて習はしめたり。かゝりしほどに、その年十六になりし者の、我と藝を試みんといひしかば、木刀をとりて三たび合ひて、三たびまで勝つことを得たりしにぞ、人々もまた興に入りて笑ひたりける。

二七 大 東 京

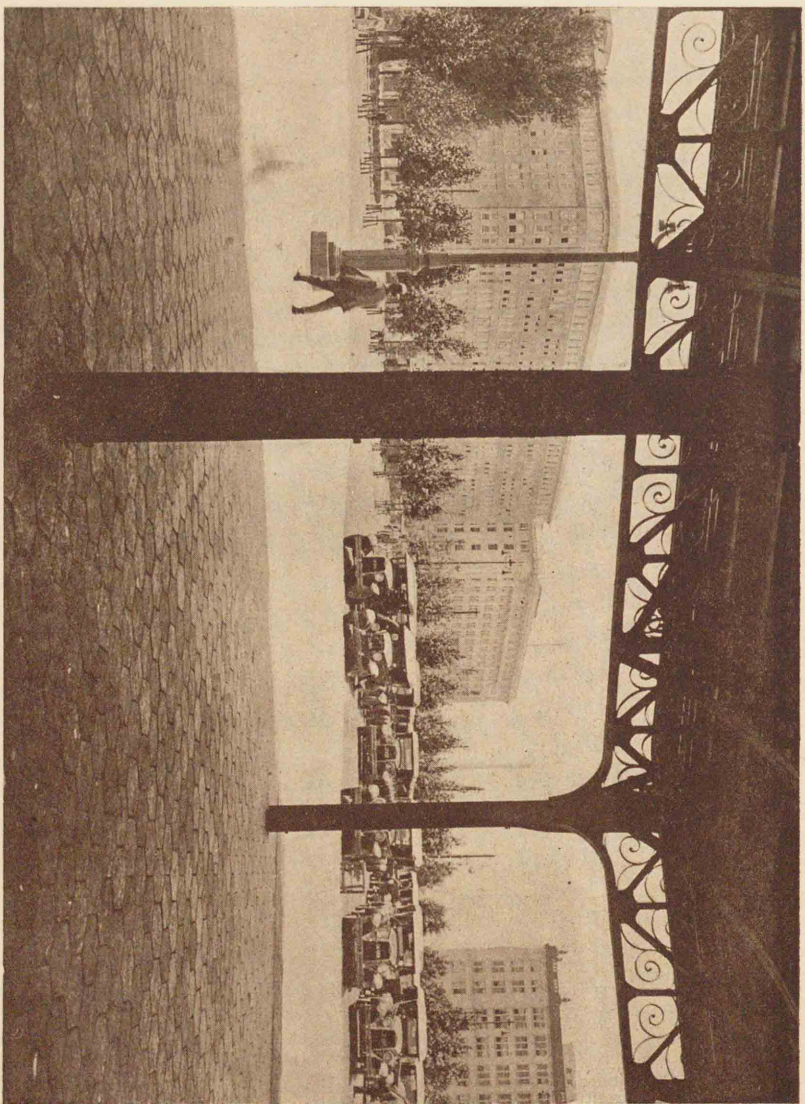
急行列車に乗つて、長い旅を續けた人は誰しも經驗することであらう、列車が大都會に近づいて來ると、一種の興奮を感ずるものである。まして一國の首都に入らうとする時などは、列車そのものまでが勢づいてゐるやうに思はれる。東海道本線の急行列車が、横濱を過ぎてからの快速力は全く格別である。遊園地に翻る日章旗、赤や青の物々しい廣告燈、白い黒い煙を吐く工場の煙突、日を一ぱいに浴びた瓦斯タンク、さては人の往來の繁い橋梁――それ等のごちやくした風物の中を走り過ぎた列車は、

愛宕山
芝區にある高
臺。
アンテナ
ラヂオの空中
線。

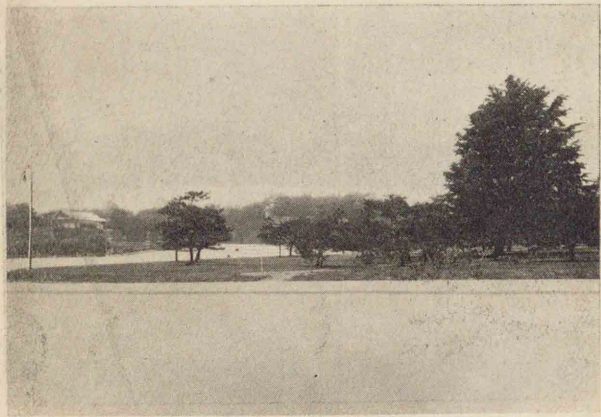
ビルディング
無数の貨事務
室を有する大
洋館。

旅人の心をいやが上に緊張させながら、いつか東京の中
樞に迫り、愛宕山の放送局のアンテナを左に見つゝ、高架
線となつて、豊の海を越え、東京驛の長いプラットホーム
にすべりこむのである。

東京驛の降車口を一步外に出た旅人の目をまづ驚か
すものは、驛前の大きな美しい廣場と、その廣場を埋めた
自動車の大群と、その廣場のかなたを取巻く蜃氣樓のや
うなビルディングの壯觀であらう。それは東京の大玄關と
して、あらゆる旅人の胸に、最初の強い印象を植ゑつけず
にはおかないやうな鮮明な都市風景である。こゝに集る
ビルディングの首位を占めるものは丸ビルであるが、それ



象印一第の京東



と相呼應して、海上ビル・郵船ビル・八重洲ビル・昭和ビルな

丸の内

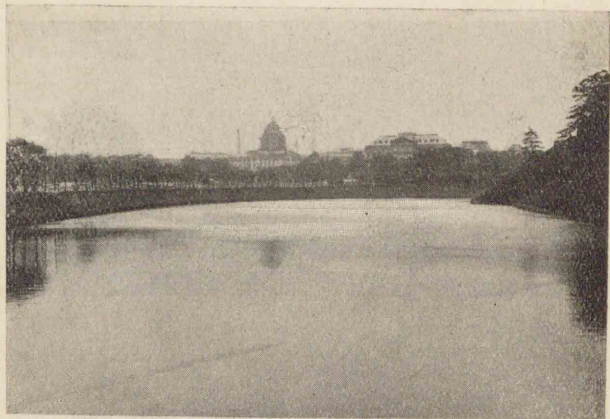
どが華やかに都の空を劃つて、
その各の内部に雑居する銀行
會社・商店・事務所では、目まぐる
しいばかりの活動が不斷に續
けられてゐるのである。

東京驛から宮城は程近い。驛
前に立てば、もうお濠を隔てて、
大内山の松の翠がちらりと
目に入る。小松の茂る丸の内に
漲るすがくしい氣分は、その目も遙かな地域と相まつ

て、全く何ともいへない感銘を人々の心によび起させる。

あの二重橋のあたりの崇高さはどうであらう。お濠の水は塵一つとゞめず、堤の芝生は刈りこまれたやうに美しい。二重橋の前は、たとひ雨の日であつても、皇居を拜する人々が絶えたことはない。

宮城を中心にして、その附近には宏莊な官衙くわんがの建物が屹立して、帝都の威嚴を示してゐるが、就中宮城の背後の高臺



(左)堂事議新と(右)部本謀參

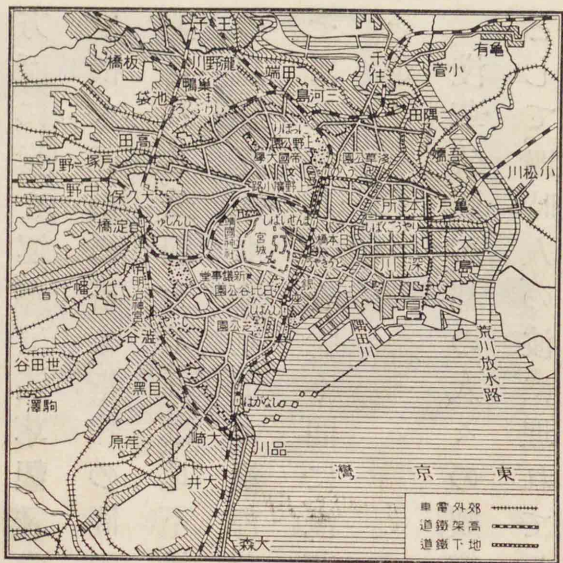
に堂々と聳え立つてゐる鐵骨塔は、目下建築中の國會新議事堂であつて、これが完成の暁には、東洋一を誇る大建築物となるべきものである。なほ丸の内の近くには、皇居を守護するやうに靖國神社が九段坂上に鎮座して、その正面の青銅の大鳥居は、これまた世界無比といはれてゐる。

丸の内を去つて、あたかも軍港に錨いかりをおろした一大艦隊とでもいひたいやうな新聞社、保險會社などの建物を右に見、左に見つゝ行けば、間もなく銀座に出る。そしてここにはまた銀座獨得の氣分が醸し出されてゐるのである。電車、自動車、乗合自動車、貨物自動車、自轉車は、街一ぱい

にほとばしる激流のやうに疾驅して、警笛の音は、十字街頭に立つた交通巡査の鳴らすベルの音と交響し、街全體が一種のうなりを發してゐるかのやうにさへ思はれる。それは、何といふあわたさしい都會生活の姿であらう。兩側に並ぶのは、悉く都下一流の商店で、飾窓の美しさを競ひ、店頭のリヂオは、快い音律を漂はし、百貨店は日に幾萬の人々を吞吐してゐる。



銀座

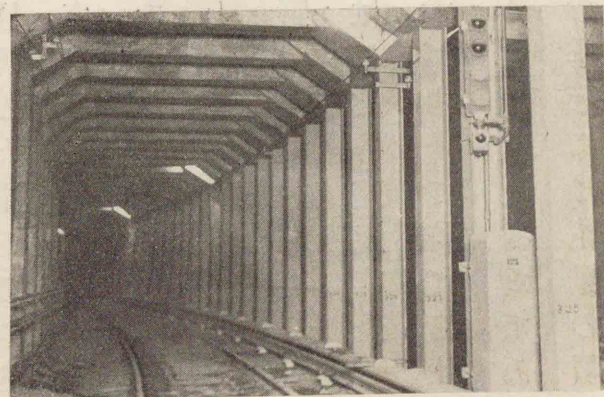


東京略圖

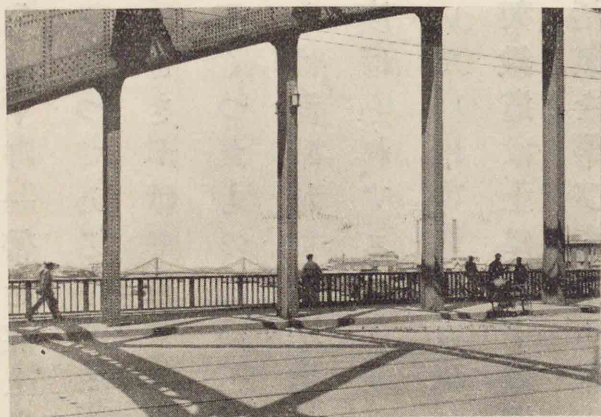
銀座から日本橋通を経て上野廣小路に至る通は、最も目貫の大通であつて、電車・自動車の流は深夜になるまでをやみがない。上野廣小路の正面は上野公園である。この公園は日比谷・芝・淺草公園と並ぶもので、特に日比谷が音楽堂をもつてゐるのに對し、美術館をもち、秋の美術の季節には、花見の頃にも増して、多くの人々を吸収する。なほこゝには博物館も

あれば、動物園もあり、不忍池を隔てては、本郷臺の帝國大學の時計臺を間近に望み、上野驛方面に歩を運べば、浅草觀音堂の屋根も、五重の塔も、指呼の間に展望される。公園を下れば、地下鐵道の高速度電車は、地上の雑沓をよそにして、人々を瞬く間に浅草へと導く。

浅草公園が都の人々の娛樂境として、四時人の波に埋れてゐることは、今も昔も變りないが、そこから數歩のうちに隅田



道 鐵 下 地



む望を橋洲清らか橋代永

川は、川面一ぱいに小蒸氣船やボートや荷舟を浮かべて、涼しい水の色を光らせながら、漫々と流れてゐるのである。そして隅田川に跨がる十に餘る鐵橋は、虹のやうに中空を切つて、世界の橋のあらゆる様式を示す展覽會でもあるかのやうな觀を呈し、對岸の本所ほんじよ、深川の新工場街に林立する煙突と共に、いかにも近代都市らしい爽

あの大正十二年九月一日に突如として起つた大震火災は、下町一帯を焦土と化した。その後、復興事業は着々と捗つてゐる中にも、この隅田川の數々の鐵橋こそは、他にさきがけて、未來の完成された大東京の姿の一部を形づくつたものといへるであらう。橋梁に次いで道路も、降れば泥、晴れては塵の誹を根柢から拭ひ去るやうに、幅も廣げられ、アスファルトの鋪裝は一日々々と完成に近づいて、いはゆる坦々砥のやうな大道が到る所に現出し、高架鐵道は上に、地下鐵道は下に敷設されて、交通は層一層活氣を帯びて來る。銀杏や篠懸や椽やアカシヤや——それ等の街路樹の美しく青葉を廣げたアスファルトの鋪

道を、心も軽く往來する人々の心には、このあたりがかつて満目焦土となり、古の武藏野を髣髴させたことがあつたとは、全く嘘のやうにしか思はれないであらう。

震火災を蒙らなかつた山の手方面は、大部分が學校や住宅をもつて占められてゐるので、下町に見るやうな目立つた變化はないが、市の周圍に接續する町村の發展はまた目覺しいもので、郊外電車の新設延長と共に、無限に膨脹し、明治神宮の鎮ります代々幡町を始め、澁谷・中野・大井・大森・瀧野川・千住・龜戸など、すべて各獨立した堂々たる市として恥づかしくなく、いくらの人口を有し、その人家櫛比のさまは、市内と殆ど變りがない。まして學校や運動

競技場乃至遊園地などは多く郊外に設置されるやうになつて来たから、今後の郊外の膨脹力は舊に倍するに違ない。

都市計畫によれば、未來の大東京は、東京驛を中心として半徑四里の圓圈内に包擁される區域をもつて、その地域とし、人口約三百五十萬を有する大都市を形づくることになるといふ。この計畫が完成された暁の大東京こそは、まことに世界の一大偉觀であらうと思ふ。

〔禁轉載〕

二六 故郷

正岡子規

世に故郷ほどこひしきはあらじ。花にも月にも、喜にも

悲しみにも、まづ思ひ出でらるゝ

は故郷なり。故郷は、學問を究め、見

聞を廣くするの地にあらず。され

ども故郷には歸りたし。故郷は事

業を起し、富貴を得るの地にあ



正岡子規

ず。されども故郷には住みたし。兩親姉妹あるがために、故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親はらから、とも今は故郷にはあらねど、なほ故郷こそこひしけれ。都にありて

城
作者の故郷は
松山縣松山市
にあり、松山城
である。

世を厭ふがために、故郷に住みたしと思ふもあらん。我は
さまでに世を厭ふふしもなくて、なほ故郷こそこひしけ
れ。思へば十餘年の昔、はやり氣の抑へがたくて、單身故郷
を出て行かんとこそは勇みしか。いざ首途といふに、一滴
の熱涙は覺えず、頬のあたりに流れ來るを、見送の人に
見せじと顔そむけたる時の苦しさ、何やら胸につかへたる
心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは、離れ憂きものな
りけり。

故郷近くなれば、城の天主閣こそまづ目を喜ばす種な
れ。低き家、狭き町、淋しき松並木、丈高き稻の穂、鼻のさきに
並びたる連山、幼き頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆

莞爾として我を迎ふるが如く、いづれ懐かしからぬはな
し。まづ身よりの家をこゝかしこと訪れて、久濶の情を述
ぶれば、年老いたるばゝ様の笑聲、瘦せたる叔父御、肥えた
る叔母御、よく居睡する女中の顔さへ、見覺えたるまゝに
少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも、歸り着きし
瞬間なり。

變らぬはめでたけれど、全く變らずば何のおもしろき
ことかあらん。變らずと見るうちに、些かながらかれもこ
れも變りゆきたるこそ、なか／＼に聞きて見てゆかしけ
れ。人の上につきて第一に變りたるは、我が従弟妹の數の
ふえたと、その人と成りたることなり。都の人こそ來た

まへれ、我もその顔見ん。などひしめきあひ、我が前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙より恥づかしげに窺ふもあり。幼き兒は始めて見たる顔もあり。さらぬも幼顔のおもかげをおぼろげにとゞめて、振分髪の子まげに變りたるも少からず。かつて見し時には、小學讀本を高らかに讀みあげて、誇りに人に聞かせたる男の子の、今ははや時事を談じ、外國の事情を説くほどになりたるもあり。唐黍の殻にてこしらへたる雛を箱の上に並べて、人形遊に餘念なかりし女の子の、年は嫁ぐべくなりて、我が膝もとに茶を汲みて置きながら、顔も得あげて退きたるなど、思へばかなたよりは、我をもしかく年とりたりと見るらん

と、獨り心に恥づること多かり。

戸の外に出づれば、標札せしいかめしき家どもは、大方聞知らぬ人の名を示せり。幼き時よりなじみになりし本屋は昔のさまながら、見馴れぬ丁稚は我を十年前の華客とも知らで、よそ／＼しくもてなしたるも本意なく覺ゆかねて知りたる道具屋は引越せしか、潰れしか、あらぬ店となりて、淋しかりし武家町の角に、賑々しく商店の軒を並べたるもあひなしや。

いで菩提所に詣でて、久しぶりに櫛しきみをも手向けんとたどり行けば、山門半ば崩れて、一條の汽車道はその傍を横ぎれり。あなやと驚きて、少し左に曲れば、數百の墓累々と

大日本讀本 卷一終

して、まだ荒れはてしとはあらねど、かの鐵道に隔てられて寺の境内を離れたれば、父君祖父君などの墓のうしろは、一步ならぬに粟黍など秀でたり。一目見るよりも覺えず目をしばたゝきぬ。

粟の穂のこゝをたゝくなこの墓を
 嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。

浦野製

昭和四年九月二十七日
 昭和五年二月十七日
 昭和五年九月二十七日
 昭和五年二月十七日
 印刷發行
 訂正再版發行



著者 高木武

發行者 富山房

代表者 坂本嘉治 馬

印刷者 精興社

東京市神田區錦町三丁目十七番地

社

發行所

東京市神田區通神保町九番地

會社資

富山房

電話九段一九二一—一九二六番
 振替口座東京五〇一—番

定價				昭和五年度臨時定價			
卷一	45	卷六	40	卷一	73	卷六	65
卷二	46	卷七	38	卷二	75	卷七	62
卷三	43	卷八	38	卷三	70	卷八	62
卷四	43	卷九	37	卷四	70	卷九	60
卷五	40	卷十	36	卷五	65	卷十	59

